

陸軍前橋飛行場物語

—— 日米両軍の発掘史料から ——

菊 池 実

はじめに

1. 史料の調査

2. 陸軍飛行場の設定—陸軍史料、自治体史から おわりに

3. 昭和20年7月10日の米軍艦載機空襲—艦載機戦闘報告書から

4. 地上の惨劇—日本側の各種資料や体験記から

—— 論文要旨 ——

陸軍前橋飛行場は、現在の群馬郡群馬町に所在していた。正式名称は前橋飛行場といったが、地元では通称、堤ヶ岡飛行場と呼んでいる。昭和18(1943)年5月から土地の測量が始まった。飛行場敷地は約160町歩に及び、19年2月には、いまだ完成していない滑走路に金網を敷いて初めての飛行機が着陸した。

戦後、飛行場跡地は水田地帯となった。平成12(2000)年度から15年度にかけて、道路建設工事にともなう発掘調査を実施した。水田耕土直下からは飛行場の埋め土や当時の様々な遺物が出土した。わずか2年ほどの歴史である前橋飛行場ではあっても、そこには昭和前半の歴史が凝縮されていた。また、発掘は、戦争で遺跡がどう壊されたかを確認してゆく作業でもあった。

陸軍前橋飛行場のような旧日本軍施設については、昭和20(1945)年8月15日の敗戦後、関係資史料の焼却処分によって、その実態については今日に至るも不明な部分が多い。

今回『陸軍前橋飛行場物語』として、あらたに発掘した日米両軍の史料を中心に、飛行場設定前後の状況、昭和20年7月10日の米軍艦載機の空襲に焦点をあて、その実態を明らかにした。分析した史料は、過去において全く取り扱われてこなかった史料類である。たとえば、米国戦略爆撃調査団報告 Entry No55「米国海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書」の中から、7月10日に前橋飛行場をはじめとする県下各飛行場に対して行われた攻撃の記録を分析したが、これによって初めて、攻撃側の実態を明らかにすることができた。さらに日本側の各種資料との照合により、当日の空襲の実態をより鮮明にすることができ、前橋飛行場を巡る歴史の一齣を明らかにした。

キーワード

対象時代 近現代

対象地域 群馬県

研究対象 戦争遺跡・陸軍前橋飛行場・陸軍史料・米国戦略爆撃調査団史料・米国海軍艦載機戦闘報告書

はじめに

平成12（2000）年度から15年度にかけて調査を進めてきた、群馬郡群馬町所在の棟高辻久保遺跡周辺一帯には、かつて陸軍の飛行場が存在した。昭和18（1943）年から20年までの極短期間存在した、この飛行場の正式名称は「陸軍前橋飛行場」といったが、地元では通称「堤ヶ岡飛行場」と呼んでいる（写真1・2）。平成2・3（1990・91）年に群馬県教委が実施した、近代化遺産総合調査のリストには未掲載の遺跡である。報告書中に「群馬の近代化概観」¹⁾を執筆された近藤義雄氏も指摘されるように、軍事関係の遺跡については十分に調査されたものではなかったからである。

ところで、陸軍前橋飛行場のような旧日本軍施設については、昭和20（1945）年8月15日の敗戦後、関係資料の焼却処分によって、その実態については今日に至るも不明な部分が多い。しかし、遺跡を調査することによって、その一部を解明をすることは可能と思われた。また、その必要性は当然にあった。近現代の遺跡といえども、群馬の近代史や地域史を考える場合に、欠くことのできない遺跡だからである。しかしながら遺跡調査の限界性とその遺存性によって、得られる情報の質と量が極めて限定的であることも事実である。そこでこれらを克服するためには、わずかに残されているであろう史料の調査や、関係者・体験者に対する聞き取り調査もあわせて実施していかなければならなかった。

本稿は、発掘調査とともに実施してきた、史料調査の成果の一端をここに紹介するものであるが、それは、前橋飛行場設定前後の状況、昭和20年7月10日の前橋飛行場に対する米軍艦載機の空襲を中心にしたものである。



写真1 敗戦直後の陸軍前橋飛行場
（飛行機は4式戦闘機「疾風」、志村市太郎氏提供）

写真2 米軍（第20航空軍）による前橋地域の偵察写真
（1945. 4. 7撮影）

- ・ 攻撃目標2774—前橋飛行場
- ・ // 1646—理研工場
- ・ // 1546—中島飛行機前橋工場（国立国会図書館所蔵）

1. 史料の調査

史料調査はおもに防衛庁防衛研究所図書館、国立国会図書館憲政資料室、狭山市立博物館所蔵史料を中心に実施した。この他、発掘調査の過程で、伊香保町の元町長深井正昭氏からは、前橋飛行場で特攻訓練を積んだ、陸軍特別攻撃隊「誠第36・37・38飛行隊」にかかわる多数の資料提供もあった。

防衛研究所図書館では、おもに陸軍航空関係の史料や飛行場関係史料にあたった。残念ながらほとんど史料は残されていなかったが、それでも「本土航空作戦記録」²⁾、「飛行場記録」³⁾、「本土における陸軍飛行場要覧」⁴⁾等を調査、前橋飛行場にかかわる記述を確認することができた。また、飛行場設定にかかわった元陸軍航空本部総務部部員、陸軍中佐の回想記⁵⁾も入手することができた。

国立国会図書館憲政資料室では、米国戦略爆撃調査団資料（USSBS 文書）を中心に調査をした。なかでも、Entry No55「太平洋戦争米国海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書」⁶⁾は詳細に調べた。米国海軍機動部隊の艦載機による日本本土空襲は、昭和20年2月16日から8月15日まで、ほぼ間断なく続いた。この期間の艦載機による爆撃に関する状況をまとめた米軍資料だからである。群馬県下への空襲を行った艦載機の戦闘報告書は20件あった。このうち7月10日に前橋飛行場を空襲した攻撃隊報告書の翻訳を試みた。

狭山市立博物館では、「遠藤三郎日記」⁷⁾を閲覧した。遠藤三郎は陸軍航空本部総務部長（昭和18年5月～9月）、航空兵器総局長官（昭和18年9月～20年8月）を歴任されたが、この間の日記を調査し、当時の飛行場設定にかかわる軍の動向の把握に努めた。



2. 陸軍飛行場の設定—陸軍史料、自治体史から

日本本土の飛行場設定については、アジア太平洋戦争開戦前から航空本部が計画し、地上兵団の経理部が主としてその実施に当たっていた⁸⁾。先頃亡くなられた歴史家・藤原彰はこう記している。「経理部将校だった父は、私が陸士を卒業（昭和16年7月筆者註）したころは、陸軍航空本部の第十（建築）課長をしていた。当時は全国で飛行場作りがさかんにおこなわれていて、父はよく日本の国家予算のなかで最高額を使う課長だと話していた」⁹⁾。

開戦頃の本土飛行場は、その大部分は教育訓練用飛行場であった（図1）。開戦後、昭和17年から18年頃の内地における飛行場設定の状況については、元陸軍航空本部総務部部員・陸軍中佐、釜井耕輝の資料⁵⁾で把握することができる。また、20年に至るまでの航空基地整備の状況については、「本土航空作戦記録」²⁾が参考になる。

まず釜井資料によると、この時期、内地に新たに設定する飛行場の緩急順序は次のようであった。1. 重要都市及び重要施設の防空並びに教育訓練用の飛行場の設定。2. 北東方面に於ける対米対「ソ」の航空両面作戦飛行場並びに防空飛行場の増加、拡張。3. 教育訓練用飛行場である。そしてその設定のために各地の偵察が、次のように行われた。

既設飛行場との空域関係、地形地貌、天候気象条件を勘案、さらに食糧の生産を出来るだけ圧迫しないという条件を加味し、水田地帯を避けて平坦な森林、畑地と絞って検討すると、教育能率本位の飛行場候補地の地方は限定された、という。これらをまず図上で詳細に検討を加えて、大体の腹案を立てる。そして施設課の主計と技師を連れて実地偵察に赴く。現地踏査は飛行場候補地の細部に亘って偵察し、その夜の中に実施計画を立てて必要な経費資材等を計算する（踏査が終わった時には、この飛行場は何百万で出来るなあと主計と技師に「ヒント」を与える。主計と技師は一晩中かかってはじき出す）。従ってもし実施するだんになると事は順調に運ぶのであった、という。

昭和17年には東北地方は東日本を除いて日本海沿岸を福井県まで、九州は南部に重点をおいてほとんど全地域、関東地方は全地域を踏査した。このように内地を広く踏査した結果、教育訓練に最も効率のよい面飛行場の設定を許し、かつ国民生活を圧迫せず設定経費の節約できる、森林または畑地等の余裕のある地域は、関東地方においては埼玉、群馬、栃木、茨城、千葉の各県に、九州地方では宮崎、鹿児島、熊本の各県に限定された。中部及び中国地方では、僅少の水田地帯を取り上げない限りほとんど不可能な状態であった、という。

また、昭和18年から19年3月に至る状況を「本土航空作戦記録」は次のように記している。航空要員の急速な

大量養成に着手したが、これに伴って従来60数個であった内地の飛行場にさらに24個の飛行場を新設、7個の飛行場の拡張を行った¹⁰⁾。新たに着工した飛行場も総て教育第一主義の飛行場であり、その規格は、一辺1300～1500メートルの面飛行場であった（図2）。前橋飛行場も教育訓練用飛行場として、このような情勢下に設定されたのである。

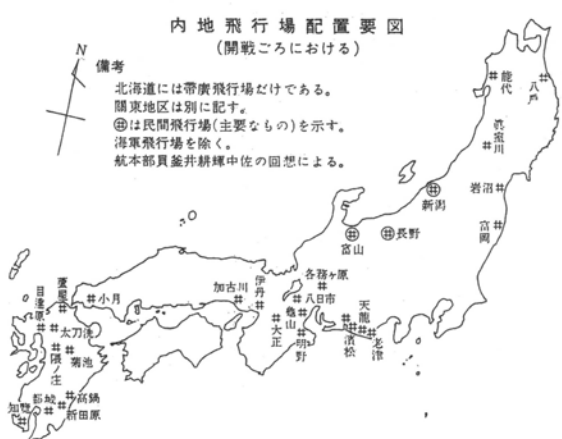
『堤ヶ岡村誌』（1955年）や『群馬町誌 通史編下』（2002年）によると、「菅谷、棟高、観音寺と、堤ヶ岡村の東側に位置するこの辺り一帯の耕地は、水田あり、畑あり平地林あり村にとっても極めて重要な産業の源でもあった」¹¹⁾が、「昭和18年5月、東京の陸軍航空本部の陸軍主計大尉井上廣也が堤ヶ岡村に来て、役場二階へ集合した耕作者、土地所有者達に対して、航空部隊の増強のため当地に飛行場を建設することになった旨を説明し、協力を求めた」¹²⁾。地元を取っては、まさに晴天の霹靂であった。

飛行場敷地は約160町歩に及び、そのうち国府村分約22町歩、中川村分1町9反、堤ヶ岡村菅谷分84町6反3畝13歩、同村棟高分51町4反4畝10歩であった。昭和18年から19年にかけて工事が進められ、19年2月15日にはいまだ完成していない滑走路に金網を敷いて初めての飛行機が着陸した。そして20年4月までに飛行場は3回の拡張工事が行われている。建設された建物施設は次のとおりである。本部1棟、兵舎2棟、格納庫大3棟、小4棟、グライダー庫1棟、衛兵所1棟、コモキキ講堂1棟、カーツー講堂1棟、シハキシ工場1棟、雑品庫2棟、発動機修理工場1棟、防火用貯水池大4、小3、食堂、炊事場各1棟、及び便所であった¹³⁾。

「飛行場記録」³⁾（図3）、「本土における陸軍飛行場要覧」⁴⁾に記載された、前橋飛行場のデータは次のとおりである。飛行場は東西1300メートル、南東～北西1800メートル、そして掩体大30ヶ所が造られていた。

昭和19年7月の「サイパン」失陥後、陸軍航空本部長は内地の教育訓練用飛行場等を一律に作戦飛行場への切り替えを命じた。また6月16日のB29における北九州爆撃後、内地の全飛行場では格納庫に代わり、地形を利用して分散した多数の飛行機置き場（掩体）が作られ、飛行機、燃料及び弾薬の分散が実施されるようになった。空襲による飛行機の損害を防止するためである。飛行場は滑走路とそれと飛行機置き場を結ぶ運搬路（誘導路）が中心となった（図4・写真3）。飛行機置き場の配置は、相互間隔100メートル以上で極力分散、地形地物を利用して特に隠蔽に留意し、必ず掩体を一機毎に設置することにした¹³⁾（図5・写真4）。前橋飛行場の運搬路は「西は久留間村に達し、北は金子、東は妙見寺の桜並木を切り倒して付近に11ヶ所の掩体壕を設けた」¹⁴⁾。

同年8月1日、前橋飛行場には宇都宮飛行学校前橋教



備考
北海道には帯広飛行場だけである。
関東地区は別に記す。
◎は民間飛行場(主要なもの)を示す。
海軍飛行場を除く。
航本部員益井耕輝中佐の回想による。

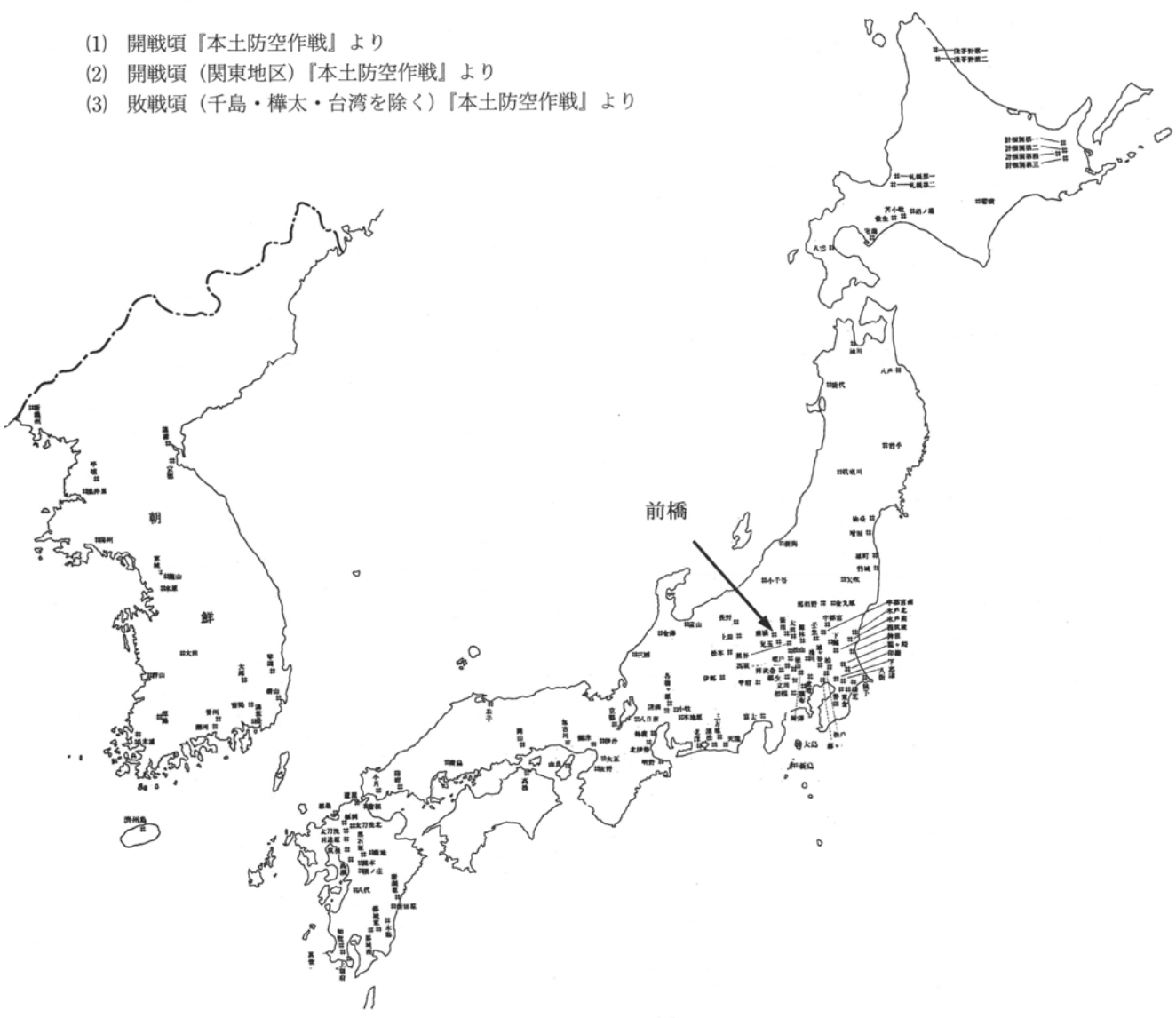
(1)



備考
海軍飛行場を除く。
航本部員益井耕輝中佐の回想による。

(2)

- (1) 開戦頃『本土防空作戦』より
- (2) 開戦頃 (関東地区)『本土防空作戦』より
- (3) 敗戦頃 (千島・樺太・台湾を除く)『本土防空作戦』より



(3)

図1 本土飛行場の配置

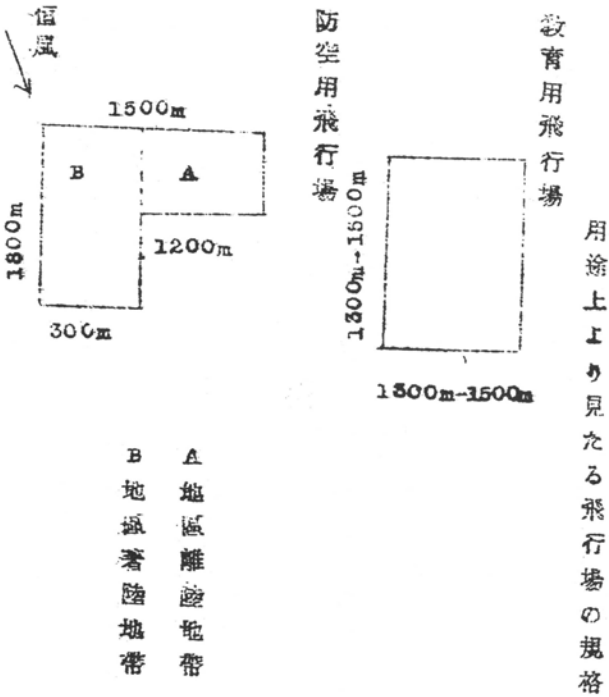


図2 飛行場の規格（「本土航空作戦記録」より）

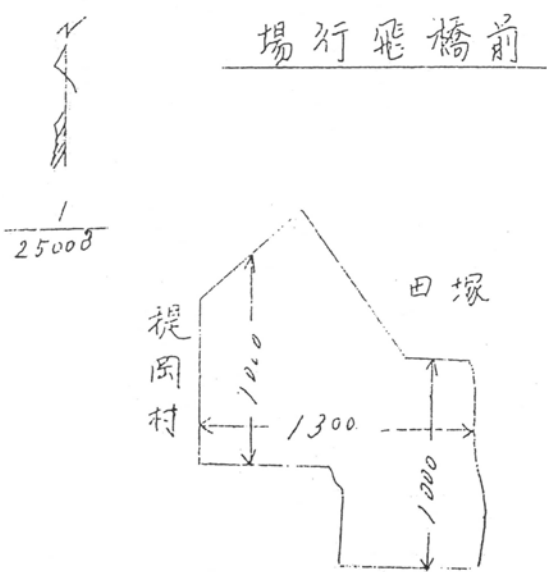


図3 前橋飛行場（「飛行場記録」より）
（左下・新田飛行場 右下・館林飛行場 「陸軍航空基地資料 第1 本州、九州」より）

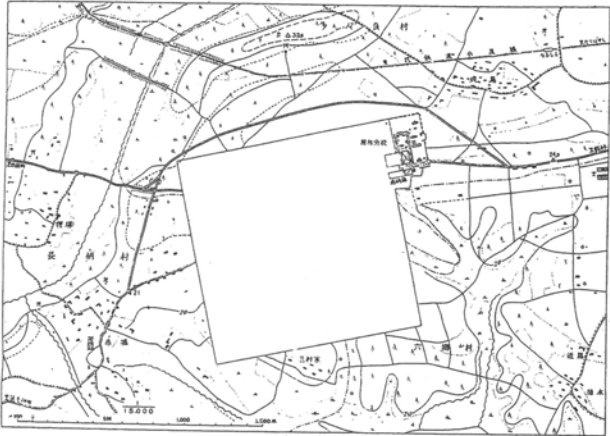


写真5 昭和19年11月の朝、前橋飛行場を離陸した95式1型乙練習機。方向舵に熊谷飛行学校のマーク。画面右端、上翼のバックに前橋飛行場が見える。
（『世界の傑作機No.73』1998年 文林堂提供）



写真6 写真5と同じ。バックは榛名山。
（文林堂提供）

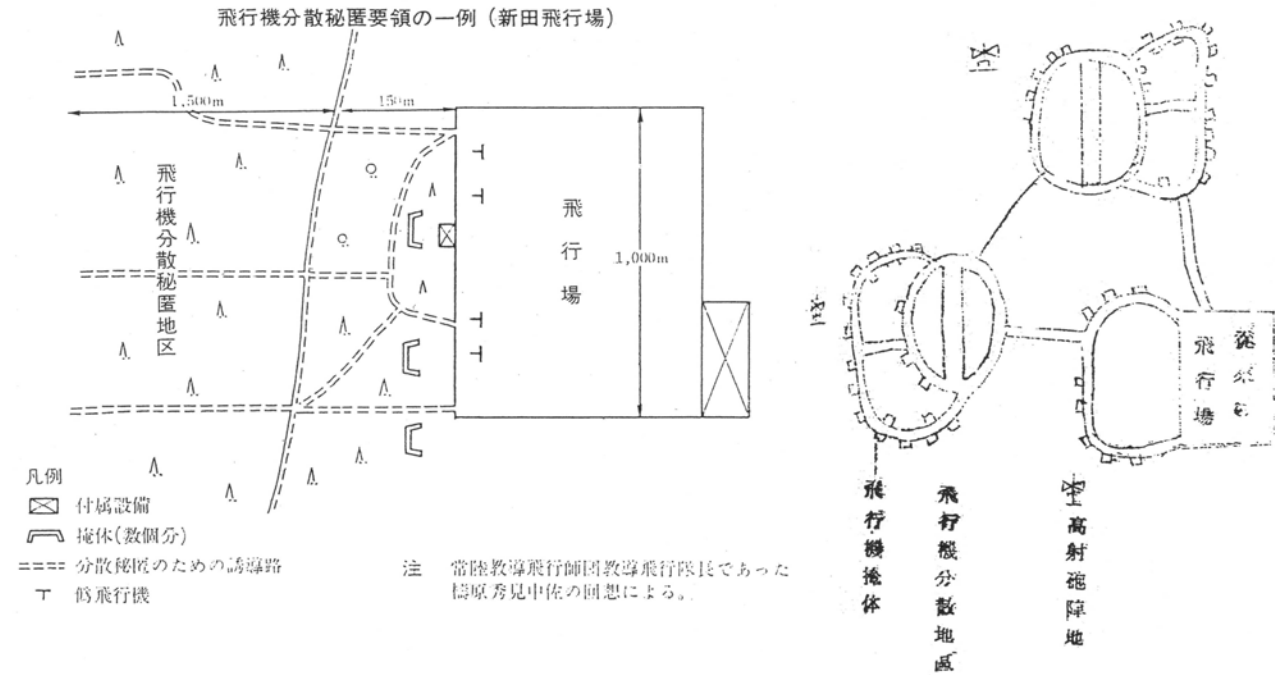


図4 飛行機分散秘匿要領（左『本土防空作戦』より 右『本土航空作戦記録』より）

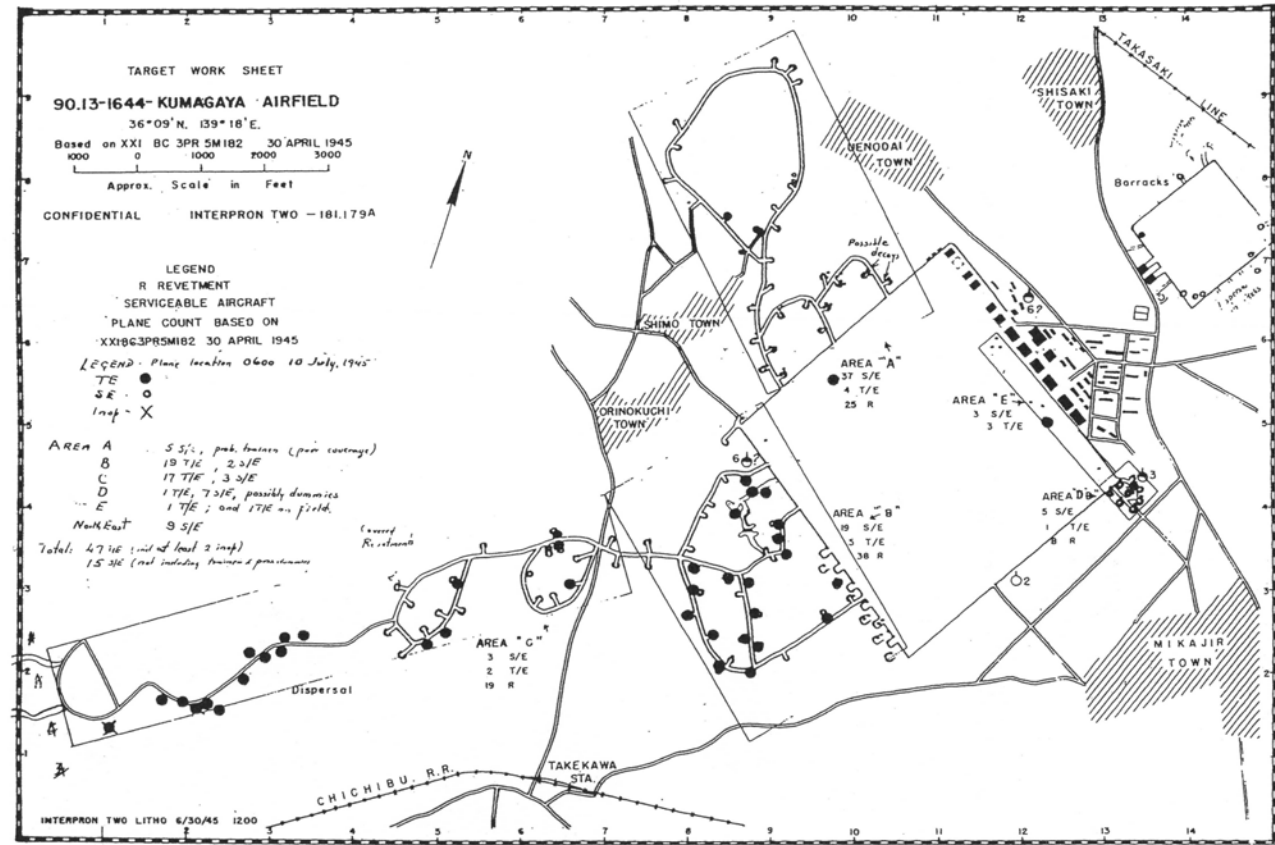


図5 米軍が把握した熊谷飛行場分散地区 TE=双発機 SE=単発機（国立国会図書館蔵）



写真3 空母ベニントンの写真隊に撮影された松島飛行場
(滑走路上の燃える飛行機と滑走路周辺に延びる運搬路、飛行機を隠蔽する掩体が見事に撮影されている。1945. 8. 9 (国立国会図書館所蔵))

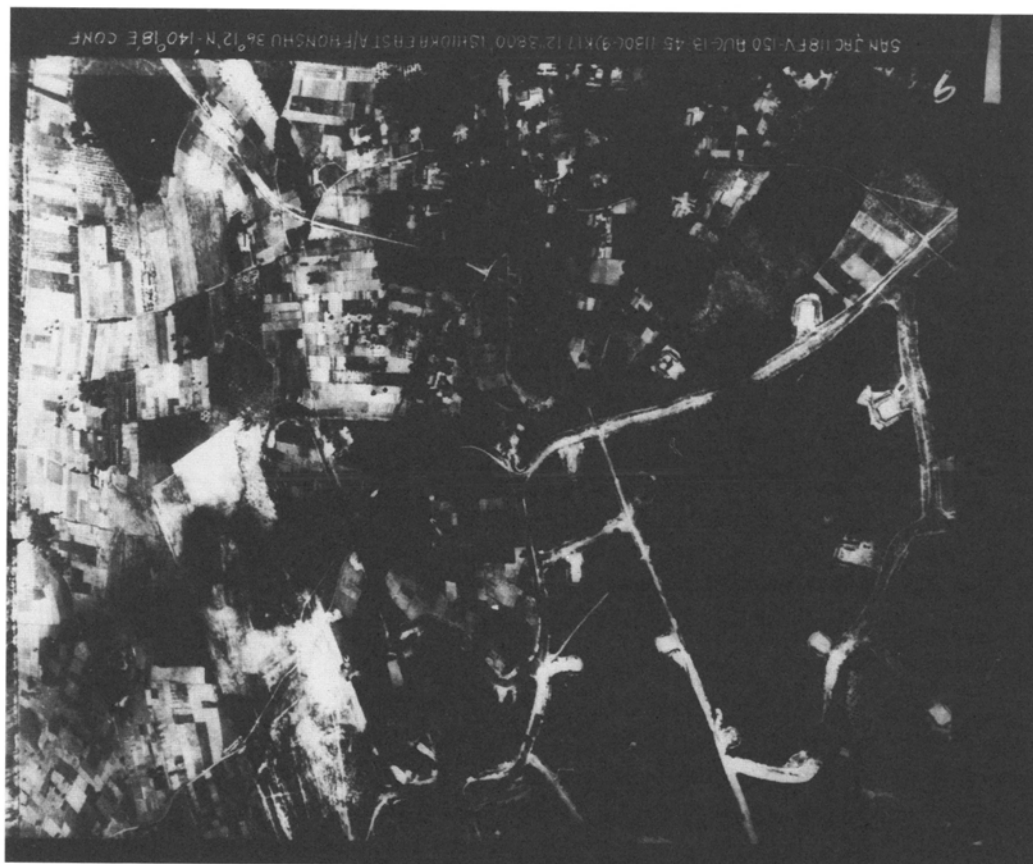


写真4 石岡東飛行場の運搬路と掩体
(空母サンジャシントの写真隊が撮影。中央やや下よりの掩体内に飛行機が見える。1945. 8. 13 (国立国会図書館所蔵))

育隊が誕生し、特別操縦見習士官約150名が入隊、少年飛行兵も約80名が古河から転属してきた。特操のグライダー訓練、特幹の練習機による飛行訓練が行われたが、10月9日には閉鎖され、かわって熊谷飛行学校前橋分教場となった（写真5・6）。この時期、「米空軍の攻撃に対しては所謂蛸足式誘導路掩体を以てしては飛行機の損害を減少し得るに至りしを以て取敢えず著名なる目標を偽装遮蔽すると共に対空火器の増強に努力」²⁾した。

昭和20年2月9日には熊谷飛行学校前橋分教場は閉鎖され、飛行場では特別攻撃隊の訓練が行われていった。

同年4月以降の状況は次のとおりである。B29や艦載機による日本本土空襲が漸次熾烈となり、飛行機の損耗が増加し、その生産は低下した。米軍の本土上陸に備え、訓練を犠牲にしても現有機を絶対確保することが必要となった。このため、「重要施設の地下移行を理想とするも資材及び労力之を許さざる為燃料弾薬は洞窟内に収容する他飛行機は取敢えず飛行場周辺の地形地物を利用して分散秘匿することとし各部隊に対して一斉に之か実施を指令せられたり」²⁾。前橋飛行場では「観音寺の観音様の西部お経塚やその西北部の雑木林、その他処々に掩体壕を設け爆弾やガソリン缶が積まれた」³⁾「建物は分散して半地下式兵舎にする為、解体作業が行われ始め、グライダー庫の如きは、建築が終わらない中に解体される始末であった」⁴⁾。前橋飛行場において短時日のうちに3回の拡張工事が実施されているのは、こうした情勢に対応したものであろう。内地飛行場の整備とその防備強化が5月末完了を目途として、全国的に展開されたのであるが、「分散秘匿せる飛行機を戦機に投じ飛行場に運搬し発進せしむる事は、甚だ困難にして敵の制空圏外にある場合に於いても最小限4時間を要し、敵の制空時においては夜間以外飛行機の運搬不可能にして攻撃機は払暁と限定され」²⁾、飛行場としての機能はほとんど喪失していたのであった。

敗戦時、県内駐屯の航空部隊は次のようであった。前橋飛行場には陸軍航空輸送部第9飛行隊前橋派遣隊の83名¹²⁾、新田飛行場には第20戦闘飛行集団飛行第112戦隊（航空総軍所属）もしくは飛行第14戦隊（第一航空軍所属、重爆、兵員定数532）・第165飛行場大隊・第166飛行場大隊・第169飛行場大隊（いずれも第一航空軍所属、兵員定数各372）・第306独立整備隊（第一航空軍所属、兵員定数172）、新田郡綿内村に第165独立整備隊（第一航空軍所属、兵員定数172）、館林飛行場には第170飛行場大隊（第一航空軍所属、兵員定数372）・第116独立整備隊（航空総軍所属、兵員定数172）、太田には航空輸送部第2輸送飛行隊（航空総軍所属）・第101独立整備隊（航空総軍所属、兵員定数172）、邑楽郡中野村に第64対空無線隊（第一航空軍所属、兵員定数196）、碓氷郡安中町に第123独立整備隊（航空総軍所属、兵員定数172）、山田郡大間々町に常

陸教導飛行師団第2教導飛行隊などであった^{14,15)}。ただし、20年7月10日の航空総軍各隊の戦力配置表によると、前橋飛行場には前記第2教導飛行隊の97式戦闘機15機、1式戦闘機9機、2式複座戦闘機3機、操縦者67名が配置されていた。

3. 昭和20年7月10日の米軍艦載機空襲—艦載機戦闘報告書から

7月に入ると、日本本土来襲の米軍機は格段と増加し、連日数百機にのぼった。昼間の来襲は、主として中・小型機、夜間の来襲は主としてB29であった。このような情勢下、陸軍航空総軍は7月10日零時をもって、制号作戦を発動する予定であった。この制号作戦とは、敵大型機を攻撃目標に、目の覚めるような戦果をあげることができないにしても、何とか敵に一矢を報いることを目的としたものであった。ところが、同日午前5時17分から、多数の米軍艦載機が関東地区に来襲し、主として飛行場攻撃を行った。早朝から午後5時10分に至るまで6波にわたって来襲した敵艦載機は、1,224機と判断された。戦況の変化が著しく急激であったため、制号作戦の発動はきわめて困難となり、遂に発動されることはなかった⁸⁾。

この空襲を行ったのは、米第38機動部隊である。空母9隻、軽空母6隻、戦艦9隻、重巡3隻、軽巡16隻、駆逐艦62隻の計105隻を数えた第38機動部隊は、空母5～6隻前後を中心に構成する任務部隊（機動群）に分かれ、第38・1任務群、第38・3任務群、第38・4任務群の3任務群で構成される大艦隊であった。フィリピン群島レイテ島のサンペドロ湾を7月1日に出動した機動部隊の任務は、日本の残存艦艇と航空兵力を撃滅し、日本軍施設や基地の破壊によって、日本本土侵攻作戦を容易にすることであった。機動部隊は燃料補給の間以外は、毎日の訓練、演習を実施しながら、一路日本に向けて北上した。7月9日には、北緯29度、東経147度28分の位置から、東京地域内の目標に対する翌日の攻撃のため、発進地点へ向けて高速進行が開始された。東京南東170マイル（約274キロ）の戦闘開始地点に到達した第38機動部隊は、10日、関東地方の飛行基地と飛行機を目標に、艦上機攻撃隊による空襲を敢行した。それは、機動部隊による日本本土の首都圏周辺中枢部に対する本格的攻撃の開始であった^{16,17)}（図6）。

前橋飛行場を含めた県下の飛行場に来襲したのは、第38・1任務群（空母3、軽空母2、戦艦3、軽巡7、駆逐艦20）に所属した空母ハンコック発進の掃討隊・攻撃隊であった（図7、表1-1、表1-2、表2）。それは、エイブル、ペイカー、チャーリー、ドッグ、イージー、フォックスなどと、ABC順に頭文字の隊名を付けられていた。個々の艦上機隊はその機種によって、主に数機または十数機の編隊で戦闘飛行隊、戦闘爆撃飛行隊、爆

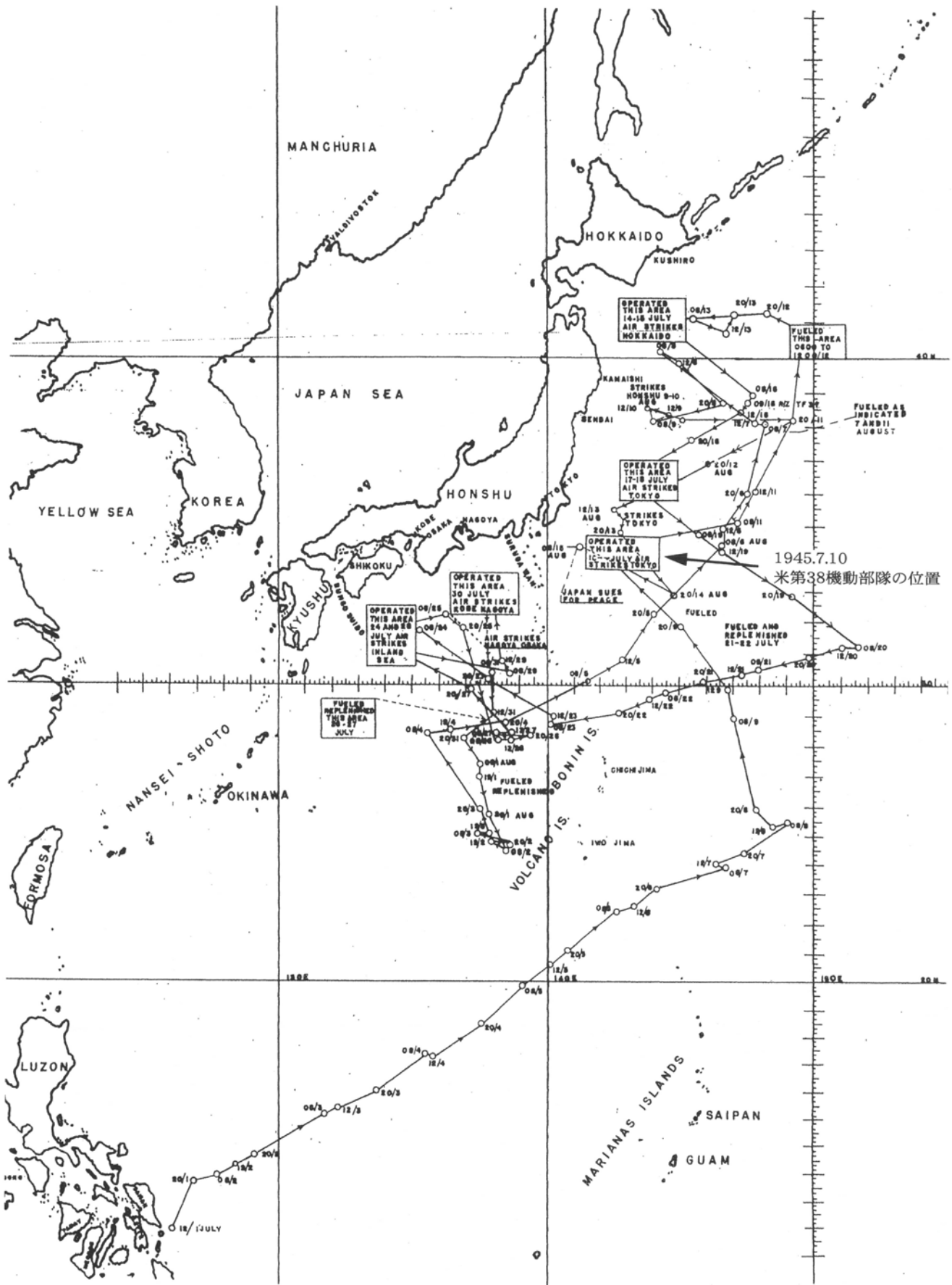


図6 米第38機動部隊の航跡図 (国立国会図書館所蔵)

表1-1 都市別爆弾投下トン数要約 (全海空軍機による)

所在地	目標の種類	目標コード	番号	年月	目標への 投下機数	投下機数 総トン数	高性能 爆弾	焼夷弾	破砕爆弾
伊勢崎	都市地域	7626	45 8	614	7	614			9
桐生	飛行場	9312	45 7	44	8	2			
小泉	飛行場	9312	45 8	7	39	275			
小泉	飛行場	9465	45 2	65	1	1			2
小泉	飛行場	9465	45 4	48	25	7			18
小泉	飛行場	9465	45 2	25	92	15		691	1
小泉	飛行場	12213	45 8	6	1	54			
前橋	飛行場	12213	45 7	84	3	244			8
太田	飛行場	17441	45 2	3	30	5			
太田	飛行場	17441	45 8	11	17	6			11
高崎	工場	22902	45 7	30	8				
高崎	鉄道設備	22902	45 7	11	5				
高崎	飛行場	22902	45 7	30	17				

表1-2 艦載機爆撃統計資料

場所	艦名	機種	任務の 番号	目標番号	部隊番号	攻撃機数	攻撃時刻	爆撃高度	投下機数	高性能 爆弾	焼夷弾	破砕爆弾
桐生	第20航空軍	F4U	45 7 10	64 09312	780	4	530	3	5	1		
桐生	第20航空軍	TBM	45 7 10	64 09312	780	11	830	3	6	2		
桐生	第20航空軍	TBM	45 7 10	64 09312	780	3	830	3	2	2		
桐生	第20航空軍	F4U	45 7 10	64 09312	780	11	830	3	6	2		
桐生	第20航空軍	F4U	45 7 10	64 09312	780	3	830	3	2	2		
小泉	第20航空軍	F4U	45 7 10	64 09465	780	12	500	3	8	2		
小泉	第20航空軍	SR2C	45 7 10	64 09465	780	930	500	3	12	2		
小泉	第20航空軍	SR2C	45 7 10	64 09465	780	6	500	3	4	1		
小泉	第20航空軍	F4U	45 7 10	64 12213	780	6	1115	3	4	1		
高崎	第20航空軍	F4U	45 7 10	64 22902	780	10	1300	3	17	4		
高崎	第20航空軍	F6F	45 7 10	64 22902	780	4	1500	3	4	4		
高崎	第20航空軍	F6F	45 7 10	64 22902	780	4	1500	3	4	4		

※この表には、前橋飛行場に対する11:50のイーシー部隊の記録が欠落している。

表2 ハンコック発進の掃討隊・攻撃隊

第1次作戦任務										第2次作戦任務										第3次作戦任務										第4次作戦任務										第5次作戦任務										第6次作戦任務																			
アイブリング部隊										ベイカー部隊										チャーリー攻撃隊										ドッグ部隊										イーजी部隊										フックス攻撃隊																			
機 種										機 種										機 種										機 種										機 種										機 種																			
F6F-5										F4U-4										TBM-3E										F6F-5										F4U-4										F4U-4										F6F-5									
第6戦闘飛行隊										第6戦闘爆撃飛行隊										第6戦闘爆撃飛行隊										第6戦闘爆撃飛行隊										第6戦闘爆撃飛行隊										第6戦闘爆撃飛行隊										第6戦闘爆撃飛行隊									
7機										4機										8機										6機										4機										4機										4機									
なし										なし										なし										なし										0										0										0									
目標攻撃										目標攻撃										目標攻撃										目標攻撃										目標攻撃										目標攻撃										目標攻撃									
3機										4機										6機										7機										4機										4機										4機									
搭載した爆弾・ロケット弾 (1機あたり)										搭載した爆弾・ロケット弾 (1機あたり)										搭載した爆弾・ロケット弾 (1機あたり)										搭載した爆弾・ロケット弾 (1機あたり)										搭載した爆弾・ロケット弾 (1機あたり)										搭載した爆弾・ロケット弾 (1機あたり)																			
3機・ロケット弾4発、260ポンド破砕爆弾2発										ロケット弾4発、500ポンド通常爆弾1発										260ポンド破砕爆弾8発、ロケット弾2発、500ポンド通常爆弾2発、500ポンド通常爆弾1発、500																																																	

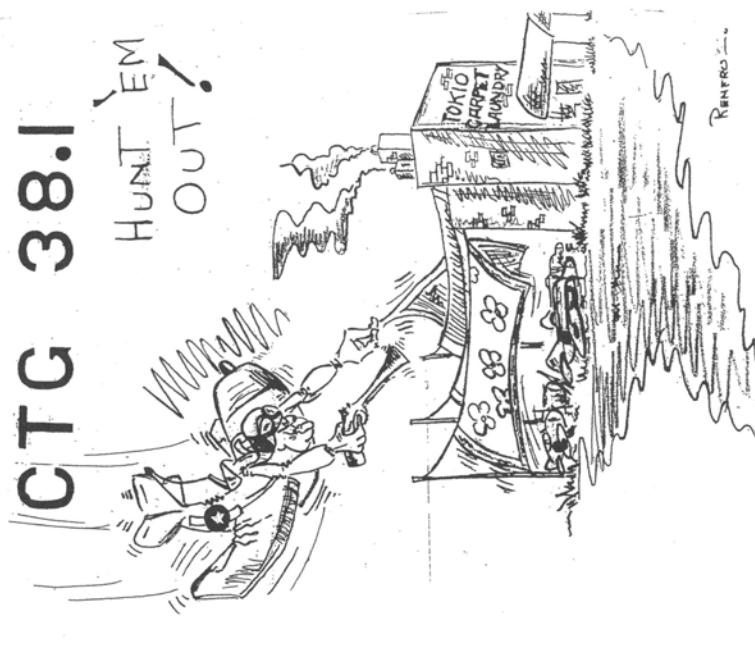
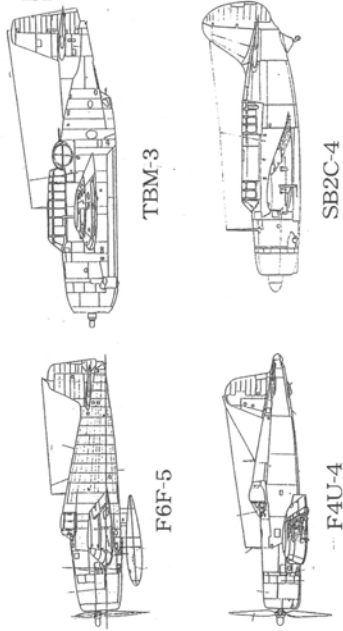


図7 第38・1任務群報告書中のイラストと群馬県下を空襲した艦載機 (S=1/288)



※艦載機のイラストは、大日本絵画『オスプレイ軍用機シリーズ』と『エアロ・ディテール』、文芸堂『世界の傑作機』所載のものから使用した。



図8 群馬県内の飛行場 (1・前橋 2・桐生(新田) 3・小泉 4・太田 5・館林) ※6・埼玉県児玉
「空襲損害評価報告書」より(国立国会図書館所蔵)

撃飛行隊、雷撃飛行隊を構成し、それらの編隊は一機種、あるいは数機種の混成によって掃討隊、攻撃隊の集団、隊群を形成した^{16,17)}。県下では、前橋・桐生(新田)・小泉・太田・館林の各飛行場(図8)が攻撃目標であった。

それでは、米国戦略爆撃調査団報告 Entry No.55「米国海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書」から、前橋飛行場をはじめとする県下各飛行場に対する空襲を見てゆきたい。この報告書には、空母を発進した掃討隊・攻撃隊がどのように戦闘を行ったか、日本機との交戦・陸上や海上の

軍事施設・飛行場・工場等に対する攻撃の状況などが記されている。書類の原文は、タイプ及び手書き複写で、空母の情報将校が、各攻撃隊の指揮官の許可を得て、上級機関に提出したものといわれているが、まだ詳しい関係は解っていないという¹⁶⁾。

なお、訳出にあたっては、石井勉、米山和也両氏の先行研究が大変に参考となった。

7月10日午前4時、海軍少佐 R.W.Schumann によって指揮されたエイブル掃討隊¹⁸⁾は、本日最初の任務のた

めに、ハンコックの甲板を発進した。第6戦闘飛行隊(グラマンF 6 F-5 ヘルキャット、7機)と第6戦闘爆撃飛行隊(ヴォートF 4 U-4 コルセア、4機)から編成され、日本の本州からおよそ130マイル(約209キロ)、北緯34度10分、東経142度30分から飛び立った。攻撃目標は桐生(新田)、児玉(埼玉)、下館(茨城)の各飛行場である。目標上空での時刻は午前5時30分から6時、帰還時刻は午前8時5分であった。飛行途中、目撃もしくは交戦した日本軍機はなかった。

重砲による対空砲火を避けて、最も短く可能な時間で日本の上空を飛行した。掃討隊が館林飛行場を通過しているとき、4機のF 6 F-5が飛行場撮影のために離脱した。他の飛行機は桐生に進んだ。桐生では貧弱、小泉では強烈な重砲による対空砲火に遭遇した。

掃討隊は、桐生(新田)飛行場の南東側分散地域を攻撃した。約15~20機の単発機が、この分散地域に目撃された。5,000フィート(1,524メートル)で260ポンド(約118キロ)破碎爆弾を投下、そして4,000フィート(約1,219メートル)で急降下、機銃掃射を行った。戦果は次のようであった。6発の250ポンド破碎爆弾全ては、分散地域に駐機していた飛行機の頭上で爆発した。猛爆撃は正確であった。単発機2機を破壊し、2機に損害を与えた。500ポンド(約227キロ)通常爆弾もこの地域で爆発し、1機を明確に破壊した。F 4 U-4投下の500ポンド通常爆弾1発が飛行場南東コーナーの格納庫地域に命中、火災が発生した。掃討隊は、館林、小泉、桐生の写真を12,000フィート(約3,657メートル)から撮影した、写真任務班と館林の北上空で集合、帰還した。

桐生(新田)飛行場に投下された爆弾は、260ポンド破碎爆弾6発、500ポンド通常爆弾4発、ロケット弾4発であった。3機を破壊し2機に損害を与えた、と報告書は記している。

午前4時30分に発進したベイカー掃討隊¹⁹⁾は、海軍少佐L.M.BIGELOWに指揮された。第6戦闘飛行隊(グラマンF 6 F-5 ヘルキャット、8機)、第6戦闘爆撃飛行隊(ヴォートF 4 U-4 コルセア、12機)から編成され、館林、小泉、前橋の各飛行場を攻撃した。目標上空での時刻は午前5時から7時、帰還時刻は午前9時15分であった。飛行途中、目撃もしくは交戦した日本軍機はなかった。

第6戦闘飛行隊のF 6 F-5の2つの隊に、第6戦闘爆撃飛行隊が動向した。戦闘飛行隊の一つは、海軍大尉Damon MAYESに指揮され、他は海軍大尉Hershel PAHLによって指揮された。写真操縦士David KIPP海軍少尉が同行した。MAYES隊は260ポンド破碎爆弾を4機に搭載、2機にロケット弾を搭載、弾薬も十分に装填した。PAHLの飛行機は、弾薬だけを装填した。掃討隊は桐生、小泉、高崎、前橋、館林、太田そして児玉飛

行場にざっと目を通した。

写真隊は前橋、小泉、館林を撮影したが、館林飛行場の写真を撮影している間に、F 6 F-5の2機が単発機を発見、それらのいくつかに損害を与えた。他のF 6 F-5隊は合間にF 4 U-4隊に動向した。彼らの最初の攻撃は小泉飛行場であった。その後、第2次攻撃を前橋飛行場に指向し、飛行場ランブの多数の練習機に狙いを付けた。F 6 F-5隊はそれらに10,000フィート(3,048メートル)から攻撃を開始、2,000フィート(約610メートル)で4発のロケット弾を発射、500~1,000フィート(約152~305メートル)の間に猛爆撃を行った。いくつかのロケット弾が格納庫に命中したが、大部分は駐機していた練習機に命中した。練習機はこのフィールドの南西側掩体内に隠されていた。16発のロケット弾を発射、2機の単発機にロケット弾が命中、機銃掃射で明確な損害を与えた。

第6戦闘爆撃飛行隊の12機は、前橋飛行場の駐機飛行機に対してロケット弾30発を発射、猛爆撃を行い2機を破壊した。戻って、館林飛行場を攻撃した。少なくとも15機がエリアに駐機していた。攻撃後、写真隊と館林の北上空で集合し、帰還した。

前橋飛行場に対する初空襲は、ベイカー掃討隊の4機のヘルキャットと12機のコルセアが行った。ロケット弾合計46発を発射、そして機銃掃射を行い、2機を破壊し2機に損害を与えた、と報告している。

午前6時43分に発進したチャーリー攻撃隊²⁰⁾の攻撃目標は、桐生、小泉の各飛行場である。攻撃隊は、第6雷撃飛行隊(グラマンTBM-3 Eアヴェンジャー、11機)、第6急降下爆撃飛行隊(カーチス SB 2 C-4 Eヘルダイバー、11機)、第6戦闘爆撃飛行隊(F 4 U-4、7機)、第6戦闘飛行隊(F 6 F-5、7機)から編成されていた。目標上空での時刻は午前8時30分から10時20分、帰還時刻は午前10時58分であった。飛行中、午前8時27分から10時の間、水戸飛行場の近くで日本軍単発機3機と遭遇、また10時10分には東京の北東40マイル(約64キロ)の地点で4機の単発機と遭遇したが、いずれも交戦はしていない。

攻撃隊は、桐生(新田)飛行場に対して260ポンド破碎爆弾64発と500ポンド通常爆弾12発を投下、ロケット弾28発を発射して、単発機24機を破壊し34機に損害を与えた。また、小泉飛行場には260ポンド破碎爆弾6発と500ポンド通常爆弾12発を投下、ロケット弾12発を発射して、6機を破壊し15機に損害を与えた、と報告している。作戦時、第6雷撃飛行隊の1機が対空砲火によって右翼に被害を受けたが、わずかな修理で済んだ。

午前9時に発進したドッグ掃討隊²¹⁾(図9)の任務は、前橋と児玉の各飛行場への攻撃であった。目標上空での時刻は午前11時15分、帰還時刻は午後1時45分であった。飛行途中、目撃もしくは交戦した日本軍機はなかった。

Form ACA-1
Sheet 1 of 5
1. GENERAL

(a) Unit Reporting: VP-6 (b) Based on: USS HANCOCK (c) REPORT VP-6 #43, VP-6 #64
(d) Take off: Date 10 July 1945. Time(s): 0900 (1)
Lat. 34-10N Long. 142-30E

(e) Mission: Sweep Dog to Maebashi Airfield. (f) Time of Return: 1345 (1)

II. OWN AIRCRAFT OFFICIALLY COVERED BY THIS REPORT.

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)
TYPE	NO.	STATUS	REMARKS	COPIES	REMARKS	COPIES	REMARKS
VP-6	1	None	4 planes - 2-500, Frag. 2 planes - 1-2000 Frag. 6 planes - 4 F.V.A.S.	1	TOCH(VI) nose and non-delay tail.		
P4U-4	8	L	4 - STARS 1 - SCOP .A.P.	1	VT(GBH) Nose non-delay tail.		

III. OTHER U.S. OR ALLIED AIRCRAFT REPORTED ON THIS MISSION.

TYPE	SQUAD	NUMBER	BASE	TYPE	SQUAD	NUMBER	BASE
			None				

IV. ENEMY AIRCRAFT OBSERVED OR DAMAGED (By own Aircraft Listed in II Only).

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)
TYPE	NO.	STATUS	REMARKS	COPIES	REMARKS	COPIES	REMARKS
			None				

(h) Apparent Enemy Mission(s)....
(i) Encounters Occur in Clouds? If so, Describe Clouds
(j) Time of Day and Brilliance
(k) Visibility

ENEMY AIRCRAFT DESTROYED OR DAMAGED IN AIR (By own Aircraft Listed in II Only).

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)
TYPE	NO.	STATUS	REMARKS	COPIES	REMARKS	COPIES	REMARKS
			None				

ENEMY A/C TYPE A/C SQUAD PILOT OR CREWMEN USED BOMB HIT, ANGLE CRASHED

Form ACA-1
Sheet 2 of 5
1. GENERAL

(a) Unit Reporting: VP-6 (b) Based on: USS HANCOCK (c) REPORT VP-6 #43, VP-6 #64
(d) Take off: Date 10 July 1945. Time(s): 0900 (1)
Lat. 34-10N Long. 142-30E

(e) Mission: Sweep Dog to Maebashi Airfield. (f) Time of Return: 1345 (1)

VI. LOSS OR DAMAGE, OR DAMAGE TO OWN AIRCRAFT (of those listed in II only).

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)
TYPE	NO.	STATUS	REMARKS	COPIES	REMARKS	COPIES	REMARKS
			None				

VII. PERSONNEL CASUALTIES (in aircraft hit in II only; identify with planes listed in VI by Nos. at left).

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)
NO.	SQUAD	NAME, RANK OR RATING	CAUSE	CONDITION	STATUS		
			None				

VIII. RANGE, FUEL, AND AMMUNITION DATA FOR PLANES RETURNING

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)	(i)	(j)
TYPE	NO.	STATUS	REMARKS	COPIES	REMARKS	COPIES	REMARKS	COPIES	REMARKS
VP-6	225	220	4 3/4	400	340	2880			6
P4U-4	230	230	4 3/4	383	328	2870			8

IX. ENEMY ANTI-AIRCRAFT ENCOUNTERED (check one block on each line)

HEAVY	MEDIUM	LIGHT	CAUSE	REMARKS	REMARKS	REMARKS	REMARKS
			None				

COMPARATIVE PERFORMANCE, OWN AND ENEMY AIRCRAFT.

None enemy aircraft encountered.

Form ACA-1
Sheet 3 of 5
1. GENERAL

(a) Unit Reporting: VP-6 (b) Based on: USS HANCOCK (c) REPORT VP-6 #43, VP-6 #64
(d) Take off: Date 10 July 1945. Time(s): 0900 (1)
Lat. 34-10N Long. 142-30E

(e) Mission: Sweep Dog to Maebashi Airfield. (f) Time of Return: 1345 (1)

XI. ATTACK ON ENEMY SHIPS OR GROUND OBJECTIVES (By own Aircraft Listed in II only)

(a) Target(s) and Location(s) Kodama and Maebashi A/P (Tokyo Plain).

(b) Time Over Target(s) 1115 (1) (c) Clouds Over Target: 10,000' 2/10's

(d) Visibility of Target: Very (e) Visibility: 25 Miles

(f) Bombing Tactics-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(g) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(h) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(i) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(j) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(k) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(l) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(m) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(n) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(o) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(p) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(q) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(r) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(s) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(t) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(u) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(v) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(w) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(x) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(y) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

(z) Bombing Results-Type VB Dive Bomb Sight Used: VB VB Mark VIII VB Mark VIII

Form ACA-1
Sheet 4 of 5
1. GENERAL

(a) Unit Reporting: VP-6 (b) Based on: USS HANCOCK (c) REPORT VP-6 #43, VP-6 #64
(d) Take off: Date 10 July 1945. Time(s): 0900 (1)
Lat. 34-10N Long. 142-30E

(e) Mission: Sweep Dog to Maebashi Airfield. (f) Time of Return: 1345 (1)

XII. TACTICAL AND OPERATIONAL DATA.

REPORT NO. VP-6 #43, VP-6 #64.

VP-6 NARRATIVE.

Six VP-6's from VP-6 joined the P4U's from VP-6 in the rendezvous sector around the Task Group and followed them to the target area--the Northwest Tokyo Plain. While the P4U's selected targets on Kodama, the VP-6's led by Lt. H.L. REID selected aircraft and installations on Maebashi Airfield.

The first run on Maebashi started about 15,000 feet. The six planes in the flight peeled off into 60-70 degree dives in a series of 120 degrees towards the hangars on the west side of the field and six single-engine planes along the North-west side of the field. At 8,000 feet they dropped their fragmentation bombs on the airfield and fired their rockets at the hangars at 4,000 feet, strafed and pulled out at 1,000-2,000 feet. The eleven fragmentation bombs were dropped landed over or near the parked aircraft, damaging all of them. There were no duds. The rockets hit the hangars and left the southernmost one afire.

During their dive they were met by light and medium AA fire from the Northwest side of the field. The fire was meager and inaccurate. No aircraft was hit.

One of the planes could not release his rockets during the dive so he proceeded 5 miles south of the field and fired his rockets into some buildings. No results were seen.

The flight climbed back to 8,000 feet for another run on the field. This time only two planes went down to attack two single engine planes believed to be George's on the Northwest corner of the airfield. The two pilot's Lt.(jg) Charles Campbell and Ensign Russell Hightman started their strafing dive from 8,000 feet, began strafing at 8,000 feet and continued strafing as they passed over the planes at 800 feet. Both planes were badly damaged and hit many times with .50 cal. machine gun fire.

The VP-6's joined the P4U's and returned to the ship at 1345 (1).

VP-6 NARRATIVE.

The strike took off at 0900. It was composed of eight P4U's and six VP-6's. It climbed through scattered clouds to 18,000 feet and proceeded to the coast where it turned inland just south of Kito(s) Airfield, and continued inland on a pre-arranged route which would avoid anti-aircraft fire. The aircraft returned to base due to fueling which was probably caused by a loose belly tank. Target information was received by radio from strike "B" which was returning from the target area.

The flight leader directed Lt. Hightman to take the Corsairs to hit Kodama Airfield with everything they carried. The airfield was approached from the north and the flight encountered a few bursts of heavy anti-aircraft fire. The planes dove on reverted areas from 15,000 feet with bombs down, released bombs and rockets at 8000 feet and pulled out at four thousand. The planes made a rendezvous at 7,000 foot five miles west of the target.

During the rendezvous Lt. Hightman spotted a train approaching a bridge over the Tone River. He waited until the train was on the bridge and accompanied by his wingman he went down in a strafing attack. He left the train stalled on the bridge enveloped in the steam which was pouring from the boiler holes.

The flight made a second attack releasing a huge bomb and rockets, and strafing with machine guns. This time the planes pulled out as low as five hundred feet.

Flares were observed burning at Kojima and at Shinoda Airfields. As the group passed over the coast heavy anti-aircraft bursts were seen from Mito Airfield.

One of the planes made an emergency landing on the U.S.S. SAN JACINTO because of a falling gas supply. Only a minimum amount of gas remained in any of the planes.

図9 ドッグ掃討隊の戦闘報告書 (国立国会図書館所蔵)

6機のF 6 F-5からなる第6戦闘飛行隊とF 4 U-4からなる第6戦闘爆撃飛行隊は、集結して攻撃目標地点である東京の北西方向に向かった。F 4 U-4は児玉、F 6 F-5はH・L・REID海軍大尉に率いられ、前橋飛行場を攻撃した。攻撃は15,000フィート（4,572メートル）から行われた。6機は編隊を離れ、飛行場の西にある格納庫に北西から急降下した。高度5,000フィート（1,524メートル）で破砕爆弾を投下し、4,000フィート（約1219メートル）でロケット弾を発射、1,500～2,000フィート（約457～609メートル）で機銃掃射を行った。11発の破砕爆弾は、駐機していた飛行機の上または付近に投下され、それら全てに損害を与えた。不発弾はなかった。ロケット弾は格納庫に命中した。降下中、飛行場北側にほんのわずかな銃撃を確認したが、たいしたものではなく飛行機にも命中しなかった。1機が降下中にロケット弾を発射できなかったのも、そのまま飛行場の南5マイル（約8キロ）にある建物に向けて発射したが、命中しなかった模様である。次の攻撃のため9,000フィート（約2743メートル）に上昇して、今度は2機で飛行場北西方向の2機の単発機を攻撃した。Charles Campbell中尉とRussell Hightshue少尉は、9,000フィート（約2,743メートル）から急降下し、3,000フィート（約914メートル）で機銃掃射を開始し、900フィート（約274メートル）まで高度を下げて飛行場上空を飛行しながら機銃掃射による攻撃を続けた。2機とも機銃掃射によるたびたびの攻撃で大いに損害を与えた。南にある格納庫は炎上した。F 6 F-5とF 4 U-4の編隊は、合流し帰還した。

この攻撃では、前橋飛行場に260ポンド破砕爆弾11発が投下され、ロケット弾24発が発射された。単発機4機を破壊し4機に損害を与えた、と報告している。

なお、飛行場南5マイルにある建物に向けて発射されたロケット弾の行方については、後ほど述べる。

午前10時15分に発進したイーजी掃討隊²²⁾は、海軍大尉A.G.BECKERに指揮された4機のF 4 U-4と4機のF 6 F-5で編成された。目標上空での時刻は午前11時50分、帰還時刻は午後2時50分であった。飛行途中、目撃もしくは交戦した日本軍機はなかった。攻撃目標へのルートは、犬吠埼の東15マイル（約24キロ）のポイントを通って、高度16,000フィート（約4,876メートル）であった。

掃討隊は前橋飛行場上空を旋回したが、価値ある攻撃目標を発見しなかったので見玉飛行場へ向かった。攻撃地区をそこに指向し、さらに太田へ進んだ。飛行隊は前橋に戻ったが、飛行機を突き止めるまで旋回した。飛行場に2機の単発機と1機の変発機を発見し、変発機はヘルキャットが攻撃、コルセアは2機の単発機を取った。攻撃は南西から北東、7,000フィート（約2,133メートル）から開始した。その時、飛行隊長は、6機以上の飛行機

を発見、射程内に捉えた。彼はロケット弾で猛爆撃、そして総てのロケット弾が飛行機の一団で爆発したことを目撃した。2機あるいは3機が炎上し、4機に損害を与えた。対空砲火はなかった。天候は広々とした雲高で良かった。可視15マイル、霧と煙があった。F 4 U-4隊は午後2時15分に帰還した。

海軍大尉Joseph W.REDDINGに指揮されたF 6 F-5隊は、飛行場の南西コーナーの掩体に向かって急降下を開始した後、現場でよきしない攻撃目標を発見した。それはOscar（米軍の日本軍用機コードネーム1式戦闘機「隼」）であった。REDDING海軍大尉によって、格納庫の前のランプに駐機していた約1ダースの単発機を見る前に、ロケット弾の一组が分散地域に発射された。銀色のOscarに命中させ撃破した。飛行機の断片は、REDDINGの飛行機の前に充満した。他のパイロットも飛行機を発見し、これらの飛行機にロケット弾15発を発射し機銃掃射を行った。飛行場にあった約72機の飛行機は、この隊によって、格納庫の前のランプ上で攻撃にさらされた。3機が炎上し、2機に機銃掃射で損害を与えた。

この攻撃では、前橋飛行場に対してロケット弾合計27発の発射と機銃掃射が行われ、7機を破壊し6機に損害を与えた、と報告している。

午後1時5分に発進したフォックス攻撃隊²³⁾は、第6雷撃飛行隊(TBM-3 E、12機)、第6急降下爆撃飛行隊(SB 2 C-4 E、10機)、第6戦闘爆撃飛行隊(F 4 U-4、4機)、第6戦闘飛行隊(F 6 F-5、8機)から編成された。攻撃目標は前橋飛行場であった。急降下爆撃飛行隊の10機と雷撃飛行隊の12機は、12機の戦闘(爆撃)飛行隊によって護衛された。F 6 F-5は低空を、写真隊は中空を、F 4 U-4は上空をカバーした。16,000フィート（約4,876メートル）の高度で接近したが、離陸した敵機との遭遇はなかった。この接近の間、対空砲火の火の粉が5、6個炸裂した。高度は正確であったが、貧弱だった。目標上空での時刻は午後3時から3時15分、帰還時刻は午後5時35分であった。

10機の急降下爆撃飛行隊は、Burke海軍少佐に指揮された。飛行隊は14,000フィート（約4,267メートル）に上昇し、機首を西に向けた。不十分だが普通程度の対空砲火に遭遇した場所は、後に高崎飛行場とわかった。6/10の雲量と霧で、攻撃目標は不明瞭であった。14,000フィートで接近を開始、10,000フィートで攻撃を開始した。Burkeは南に旋回しながら接近した。5,500フィートでロケット弾を発射、5,000フィートで爆弾を投下、4,000フィートで機銃掃射を行った。彼の爆弾とロケット弾は格納庫地域に命中した。Kingの急降下は、南東から北西に、ロケット弾を発射し爆弾を投下した。Kingもまた格納庫の建物を狙った。Hawksは10,000フィートで西から入った。ロケット弾を発射し爆弾を投下した。彼の爆

弾もまた、格納庫地域に命中した。Smithは10,000フィートから突っ込み、6,000フィートから高崎飛行場の東の遮蔽されたエリアにロケット弾を打ち込んでいった。彼は同じ場所に爆弾を一個落とした。他の爆弾は、空母に戻る途中である町に捨てた。Decosteは東から北西に向かって急降下したが、約5,000フィート（約1,524メートル）できりもみ降下してしまい、約200フィート（約61メートル）まで回復しなかった。このためロケット弾を町に発射し、爆弾は帰途海に捨てた。両翼はきりもみの結果、歪んでいることがあとでわかった。

12機の雷撃飛行隊は260ポンド破碎爆弾8発を搭載、180マイル（約290キロ）離れている水戸飛行場に高度11,000フィートで午後2時25分に到着した。そこから針路を変え前橋飛行場へ進んだ。飛行場を覆う7/10雲量のために、見逃してしまった。飛行隊がそれをわかったときには、すでに約20マイル（約32キロ）進んでしまった。飛行隊はコースを逆にとって雲の隙間から攻撃した飛行場は、前橋と思われたが、のち写真により近くにある高崎飛行場と確認された。攻撃後、2機の雷撃機は前橋の街に彼らの爆弾を捨てた。2ヶ所で火災が発生した。

戦闘飛行隊の8機のうち4機は、写真班で攻撃には参加していない。前橋飛行場を見失って隣接する高崎飛行場を攻撃した。2機が飛行場の北東側の掩体と同じエリアの格納庫の一つ、そして南西コーナーの対空砲火の陣地の中心部を攻撃目標に選んだ。掩体内に飛行機はなかった。しかしながら、12発のロケット弾と3発の260ポンド破碎爆弾を掩体の上に投下した。4発のロケット弾が格納庫を貫通した。写真隊は内陸の煙に妨げられ、水戸北、水戸南、筑波、壬生そして他の飛行場を撮影した。

この攻撃では、260ポンド破碎爆弾80発、500ポンド通常爆弾21発が投下され、ロケット弾37発が発射された。2機に損害を与えた、と報告している。

機動部隊は7月11日、翌日の燃料補給のため、北緯40度11分、東経150度06.8分付近へ退去した。

以上が、1945年7月10日に県下各飛行場に対して行われた、米軍艦載機戦闘報告書の概要である。これによって初めて、攻撃側の記録が明らかとなり空襲の実態がより鮮明になった。

この日、県下に来襲した敵艦載機は計6波延べ115機（チャーリー攻撃隊SB 2 C-4 Eのうちエンジントラブルで途中帰還した1機とそれに同行した1機を含む）に及び、このうち攻撃に参加した機数は延べ101機、他は写真偵察機であった。攻撃機は、グラマンF 6 F-5 ヘルキャット延べ40機、ヴォートF 4 U-4 コルセア延べ31機、グラマンTBM-3 Eアヴェンジャー延べ23機、カーチスSB 2 C-4 Eヘルダイバー延べ19機である（表3）。写真偵察機は、第1次のエイブル掃討隊に4機、第2次のペイカー掃討隊に2機、そして第6次のフォックス攻

撃隊に4～6機の計10～12機を数えた。日本軍飛行場の分散地区に秘匿された飛行機の位置を確認するために、写真を撮影することが来襲の目的であった。午前中に撮影した写真にもとづいて、帰還後、現像された写真が、午後の目標攻撃に使用された¹⁶⁾（写真7・8・9）。また最終の攻撃隊に同行した写真偵察機は、戦果確認のための撮影を行う目的であったと思われる。

掃討隊・攻撃隊の空母発進時間を見ていくと、次のことがわかる。早朝に2つの掃討隊と1つの攻撃隊が発進したが、第1次の掃討隊が帰還（8:05）後、1時間経って第4次の掃討隊が発進（9:00）、第2次の掃討隊が帰還（9:15）後、第5次の掃討隊が1時間後（10:15）に、第3次の攻撃隊が帰還（10:58）後、昼をはさんだ2時間後に第6次の攻撃隊が発進（13:05）している。ハンコック搭載の第6雷撃飛行隊（TBM-3 E）は15機である²⁴⁾。第3次に11機、そして第6次に12機が含まれていることから判断すれば、この雷撃飛行隊に関しては2時間後に再度発進していったものと思われる。なお、掃討隊とは、戦闘（爆撃）機主体の編成をいい、攻撃隊とは、これに急降下爆撃機と雷撃機が加わって編成された集団を指したようである。

県下に最初に来襲したのは、第2次のペイカー掃討隊であった。そして前橋飛行場には、このペイカー掃討隊の16機（目標上空での時刻5:00—7:00、日本側記録6:38—）、ドッグ掃討隊6機（目標上空での時刻11:15、日本側記録10:41—11:12、住谷修日記10:47—）、イーजी掃討隊8機（目標上空での時刻11:50、日本側記録11:45—12:35、住谷修日記11:58—）の計3波にわたり延べ30機が来襲した。内訳はグラマンF 6 F-5 ヘルキャット延べ14機、ヴォートF 4 U-4 コルセア延べ16機である。投下爆弾総数は、260ポンド破碎爆弾11発、ロケット弾97発であり、機銃掃射が行われた。そして日本軍単発機9機（「隼」1機を含む）を破壊し14機に損害を与え、格納庫を炎上させた、と報告している。

しかし第38・1任務群の全体資料中にある各種統計資料を見ると、前橋飛行場に対する攻撃では、単発機の破壊9機、損害を与えた単発機11機とあり、機数において若干の相違がある。

日本側の被害状況については、正式な記録が残されていないために、残念ながら比較検討することはできない。『戦災と復興』²⁵⁾に記された四発1機双発1機炎上の事実はなく、相当数の単発機が損害を受けた。その中には、1式戦闘機「隼」の姿もあった²⁶⁾。ただし、艦載機戦闘報告書は全体的に誇大な報告が多い、とも指摘されている¹⁶⁾。

前橋飛行場の南西側掩体内に隠されていた練習機に攻撃を加えたペイカー掃討隊、約72機の飛行機を確認したというイーजी掃討隊は、陸軍航空輸送部第9飛行隊前



写真7 筑波西飛行場の運搬路と掩体
(1945年7月10日、空母サンジャシント写真隊の撮影。掩体内の飛行機はすべてチェックされている。(国立国会図書館所蔵))

表3

エイブル掃討隊 桐生（新田）・児玉・下館の各飛行場攻撃 目標上空時刻：0530-0600（日本標準時）					
照準点	規模またはトン数	攻撃機数部隊	各照準点で消費した爆弾と弾薬	照準点に対する命中数	与えた損害
1	桐生飛行場南東分散地域	3機 VF-6	260ポンド破砕爆弾6発、50口径弾薬	6	2機破壊 2機に損害
5	桐生飛行場南西コーナー地域掩体	3機 VBF-6	500ポンド通常爆弾3発、ロケット弾4発	2	1機破壊
6	桐生飛行場建物	1機 VBF-6	500ポンド通常爆弾1発	目撃できなかった	目撃できなかった
ペイカー掃討隊 館林・小泉・前橋の各飛行場攻撃 目標上空時刻：0500-0700（日本標準時）					
1	小泉南東コーナー掩体	3機 VF-6	260ポンド破砕爆弾6発	4	単発機4機破壊
2	小泉飛行場の一式陸攻	1機 VF-6	260ポンド破砕爆弾2発	2	双発機1機破壊
3	前橋飛行場南西側掩体	4機 VF-6	ロケット弾16発、50口径弾薬	2	単発機2機に損害
4	館林南東飛行機掩体	5機 VF-6	50口径弾薬	確定せず	単発機6機に損害
5	館林飛行場の飛行機	1機 VF-6	50口径弾薬	確定せず	双発機1機に損害
6	小泉掩体内の飛行機	8機 VBF-6	500ポンド通常爆弾4発	3	2機に損害 2機破壊
7	小泉エプロン上の飛行機	4機 VBF-6	500ポンド通常爆弾2発	1	1機に損害 2機破壊
8	小泉飛行場の飛行機	1機 VBF-6	500ポンド通常爆弾1発	1	1機破壊
9	小泉格納庫	1機 VBF-6	500ポンド通常爆弾1発	1	1機破壊
10	小泉砲陣地	1機 VBF-6	ロケット弾2発	至近弾	中位の損害
11	前橋エプロン上と掩体内の飛行機	12機 VBF-6	ロケット弾30発	確定せず	2機破壊
12	館林エプロン上の飛行機	10機 VBF-6	猛爆撃	多数	3機に損害 1機破壊
チャーリー攻撃隊 桐生（新田）・小泉の各飛行場攻撃 目標上空時刻：0830-1020（日本標準時）					
1	桐生飛行場西掩体の飛行機	4機 VT-6	260ポンド破砕爆弾32発、機銃400発	14	7機破壊 6機に損害
2	桐生飛行場の飛行機	4機 VT-6	260ポンド破砕爆弾16発、機銃200発	10	5機破壊 4機に損害
3	桐生飛行場東掩体の飛行機	3機 VT-6	260ポンド破砕爆弾8発、機銃300発	2	2機に損害
4	桐生飛行場	3機 VB-6	500ポンド通常爆弾6発・ロケット弾4発	6、4	7機破壊 4機に損害
5	小泉飛行場	5機 VB-6	500ポンド通常爆弾10発・ロケット弾10発	10、10	3機破壊 11機に損害
6	小泉飛行場工場	1機 VB-6	500ポンド通常爆弾2発・ロケット弾2発	2、2	軽微
7	桐生飛行場掩体	7機 VBF-6	500ポンド通常爆弾6発・ロケット弾24発	2-3、不明	2機破壊
8	桐生飛行場北東掩体の飛行機	4機 VF-6	260ポンド破砕爆弾8発	8	3機破壊 3機に損害
9	小泉飛行場ランプの飛行機	1機 VF-6	260ポンド破砕爆弾2発	2	1機破壊 2機に損害
10	小泉飛行場掩体の飛行機	1機 VF-6	260ポンド破砕爆弾2発	2	1機破壊 1機に損害
11	小泉飛行場分散地域	1機 VF-6	260ポンド破砕爆弾2発	2	1機破壊 1機に損害
ドッグ掃討隊 前橋飛行場攻撃 目標上空時刻：1115（日本標準時）					
6	前橋飛行場西側格納庫	5機 VF-6	ロケット弾20発・50口径弾薬	確定せず	重大
7	前橋飛行場北西部単発機6機	6機 VF-6	260ポンド破砕爆弾11発・50口径弾薬	確定せず	6機に損害
8	前橋飛行場5マイル南西建物	1機 VF-6	ロケット弾4発	確定せず	確定せず
9	前橋飛行場北西上空単発機2機	2機 VF-6	50口径弾薬	確定せず	重大
イーजी掃射隊 児玉・前橋・太田の各飛行場攻撃 目標上空時刻：1150（日本標準時）					
3	前橋飛行場の飛行機	4機 VBF-6	猛爆撃ロケット弾12発	4-6	3機破壊 4機に損害
7	前橋飛行場の飛行機	4機 VF-6	ロケット弾15発・50口径弾薬	確定せず	単発機爆破。他の3機炎上、2機に損害
フォックス攻撃隊 前橋飛行場攻撃、変更高崎（児玉）飛行場 目標上空時刻：1500-1515（日本標準時）					
1	高崎飛行場の北東地域	6機 VT-6	260ポンド破砕爆弾48発	31	2機に損害
2	高崎飛行場の南西地域	4機 VT-6	260ポンド破砕爆弾32発	20	観察せず
3	高崎飛行場の格納庫と掩体	10機 VB-6	500ポンド通常爆弾17発、ロケット弾13発	16、12	重大
4	高崎飛行場の掩体	4機 VBF-6	500ポンド通常爆弾4発、ロケット弾24発	不明	観察せず

※ VF＝戦闘飛行隊（グラマン F6F-5ヘルキャット）、VBF＝戦闘爆撃飛行隊（ヴォート F4U-4コルセア）、VT＝雷撃飛行隊（グラマン TBM-3E アヴェンジャー）、VB＝爆撃飛行隊（カーチス SB2C-4E ヘルダイバー）

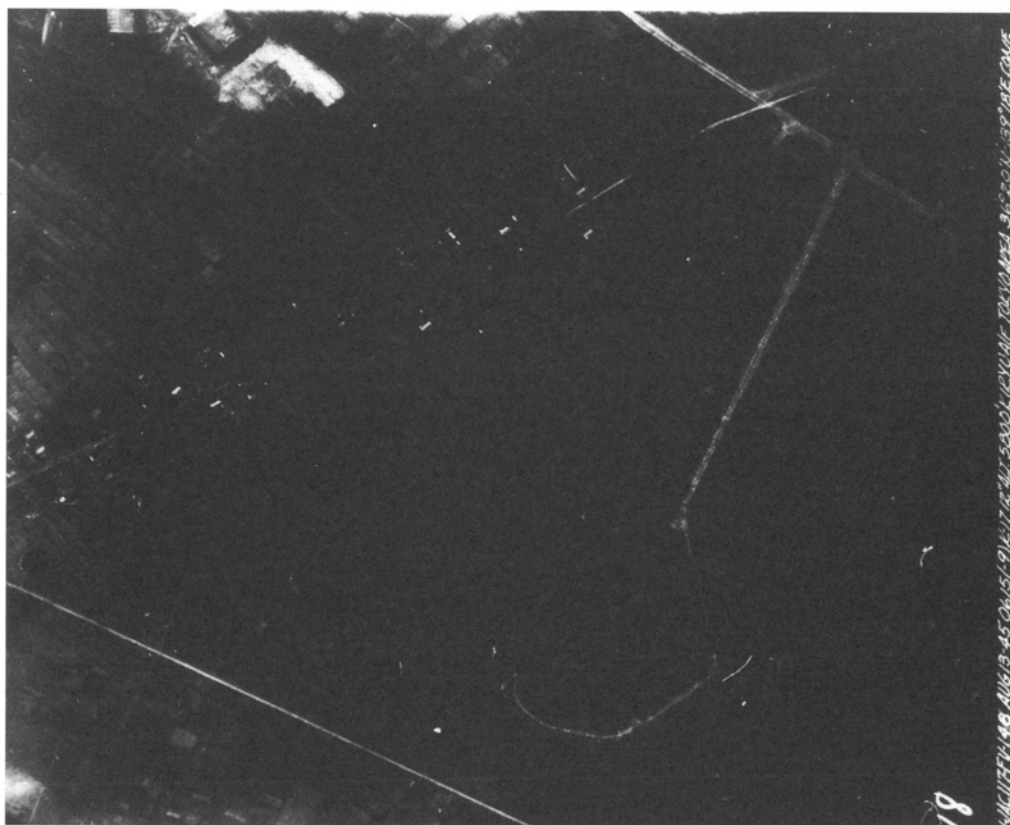


写真8 桐生（新田）飛行場の運搬路の垂直写真
(1945年8月13日午前6時15分、空母サンジャシント写真隊の撮影。(国立国会図書館所蔵))

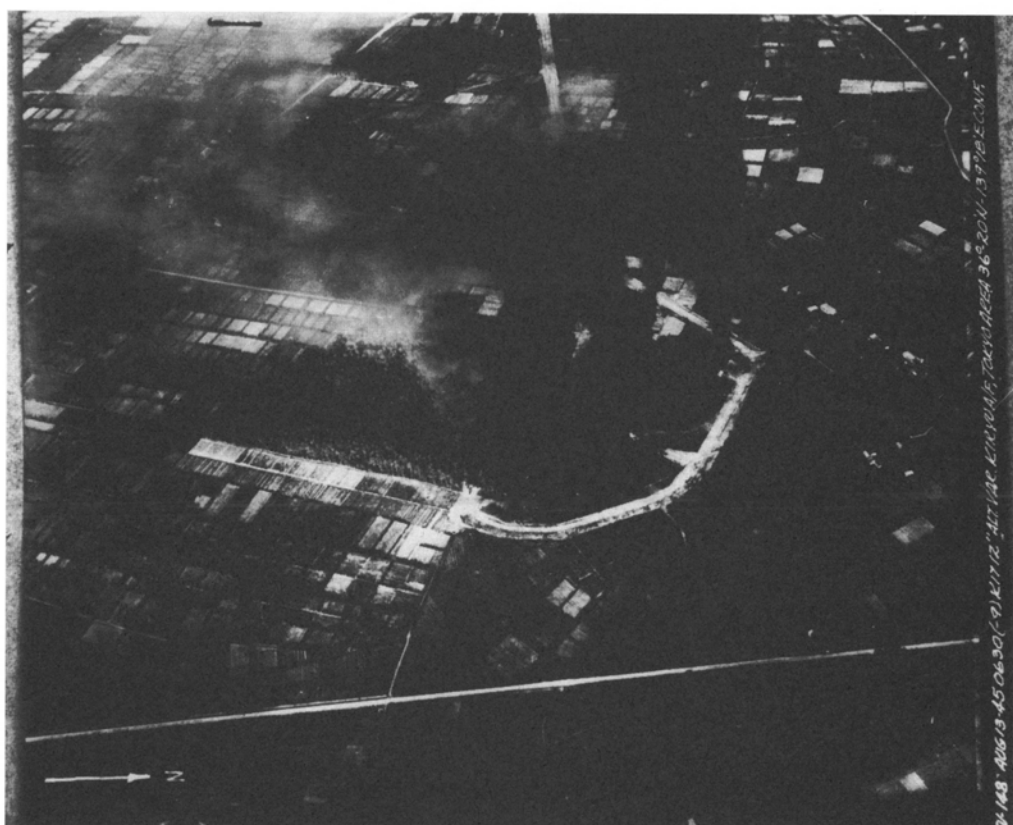


写真9 桐生（新田）飛行場の運搬路と掩体内飛行機に対する攻撃
(1945年8月13日午前6時30分撮影。掩体内の飛行機から黒煙が立ち上っている。写真8の斜め写真。(国立国会図書館所蔵))

橋派遣隊の95式1型練習機（黒塗りの赤とんぼ）を攻撃した可能性がある¹²⁾。

なお、報告書中の桐生飛行場は新田飛行場を指すが、フォックス攻撃隊が空襲した高崎飛行場については、被害を受けた日本側の記録でその場所を特定しなければならない。高崎飛行場は存在していないからである。

4. 地上の惨劇—日本側の各種資料や体験記から

この日、警戒警報・空襲警報が間断なく発令された。午前5時14分に警戒警報発令、同20分に空襲警報が発令された。そして午前7時27分に解除となったが、この間約2時間、『戦災と復興』は午前5時40分に小型機22機、6時19分に小型機14機、同38分に小型機18機、この内の一部が生品、太田方面から桐生、前橋、高崎方面に飛来旋回、と記録している。これらに該当する米軍掃討隊・攻撃隊の艦載機は次のとおりであろう。午前5時40分の22機は、ペイカー掃討隊の20機の内16機による小泉飛行場への攻撃、午前6時19分の14機は、エイブル掃討隊の11機の内7機による桐生飛行場への攻撃、同38分の18機は、小泉飛行場攻撃後のペイカー掃討隊16機による前橋、館林の各飛行場への攻撃である。

第2回目の警戒警報発令は午前8時17分、同28分に空襲警報発令、そして午前9時53分に解除となった。『戦災と復興』には、この間約1時間30分の飛来記録の記載はない（前橋地方空襲一覧のため）が、チャーリー攻撃隊の36機が飛来し、桐生、小泉の各飛行場を攻撃した。

第3回目の空襲警報発令は午前10時11分、同13時20分に解除となった。この間約3時間、午前10時41分から11時12分に小型機13機が栃木佐野方面から桐生に侵入前橋高崎堤ヶ岡飛行場に銃爆撃、午前11時45分から12時35分、小型機8機が足利方面から侵入前橋高崎及堤ヶ岡飛行場を銃爆撃、と『戦災と復興』は記録している。前半の13機とは、ドッグ掃討隊の12機のうち6機による前橋飛行場への攻撃、後半の8機はイーजी掃討隊の8機による前橋、3機による太田の各飛行場への攻撃が該当する。

第4回目の空襲警報は14時12分に発令、17時12分に同解除となった。この間3時間、飛来したのは、前橋飛行場を見失って高崎飛行場を攻撃したという、フォックス攻撃隊の34機であった。

これらを整理したものが表4である。日本側はほぼ正確な飛来機数を捕捉していた。

当時の新聞はこの空襲をどのように伝えたのであろうか。空襲のあった翌々日、7月12日の「上毛新聞」は、大本営発表（昭和20年7月10日14時30分）を「一、今七月十日朝来敵機動部隊より發進せる艦上機は數次に亘り主として關東地方各地のわが航空基地に來襲せり 二、七月十日十三時迄に來襲せる敵機は延八百機なり」と伝えている。さらに「艦載機下怒り満つ必勝縣民」として

「延べ約七十機が重要施設に執拗な波状攻撃を繰り返へし、更に前橋、高崎などの市街地にも謀略の爆弾投下と機銃掃射を敢てした、(中略)わが防空隊の敢闘にはゞまれ重要施設は言ふまでもなく市街地の被害も極めて輕微であつた、この日百五十万縣民の血を逆流させたのは前橋市の国民学校に機銃掃射を加え、更に多野郡下を進行中の八高線旅客車、田植中の農民あるひは勤勞奉仕中の某中学生らにいづれも機銃掃射を加えた暴挙の数々である」「県都前橋に、そして県下主要都市高崎に、敵編隊機の侵入を許したのは今回が最初であり、然もこれら市民たちは初めて目前に敵爆弾を受け、機銃掃射の雨を浴びて今こそ腹のそこから憤激を發し、敵撃砕を誓つたのである」

新聞の伝える防空隊の敢闘に米軍機は阻まれることはなかった。迎撃に飛び立った日本軍機は皆無であり、また小泉で強烈な対空放火に遭遇はしたものの、他は貧弱であった。報告書中にも「対空砲火の火の粉が5、6個炸裂した。高度は正確であつたが、貧弱だった」等の記述が見られる。作戦時、わずかにチャーリー攻撃隊の雷撃機1機が、対空砲火によって右翼に被害を受けたものの、攻撃に参加した全機無事帰還を果たしている。フォックス攻撃隊の報告書末尾には「The return trip to base was uneventful.」と結ばれていた。

また、攻撃目標は、基本的には飛行場の分散された地区に秘匿された日本軍機であった。飛行場周辺に秘匿された掩体内の飛行機が目標とされたことにより、市街地は被害輕微となったが、掩体周辺の民家にロケット弾や機銃掃射の雨が降りそそいだ。その中で、中央前橋駅付近に投弾、死者を生じた、と記録²⁵⁾されていることから、攻撃目標から逸脱した攻撃が行われたことも確かであった。これは高崎飛行場を攻撃（15:00～15:15）後、2機の雷撃機が余った「爆弾を前橋の街に捨てた」結果と思われるが、日本側の記録との間に時間のズレがある。

「上毛新聞」7月12日付けには、「午前十時すぎ敵編隊のうち一機は前橋市上空で突如急降下し、小型爆弾を投下すると同時に機銃掃射を加へ即死者を出した」とある。当時の錯綜とした情報下、日本側記録の間違いである可能性もあるが、米軍側の報告書には記載されなかった、攻撃目標から逸脱した投弾の可能性も捨てきれない。ところが、群馬郡東村（現前橋市）にも投弾1発が記録されていることから判断すると、中央前橋駅付近への投弾と東村への投弾が、2機の雷撃機によって「捨てられた爆弾」と思われる。午後3時15分過ぎのことである。現前橋市への投弾はこれ以外に記録されていないからである²⁵⁾。

前橋飛行場に対する攻撃をつぶさに実見した住谷修の日記には、次のように記載されている。「十時四十七分村の北方を前橋北郊より飛来したグラマン戦闘機六機が二

千五百米位の低空で西進し来り村ヤクシ堂北側より西国分のスグ北を通り新田国分上空より金子の近くに進んだ時、南方に東から西進する我一機あり之を認めた敵六機はクルリと反転南へ向ひ急降下にうつると見る一瞬六機一斉にドドドドと機銃を掃射、我機は黒煙に包まれて撃墜された。此の六機の内之二機は再度超低空で十時五十三分飛行場内の中島工場を銃撃引間の上空を低空飛行し一旦京へ去ったが十一時五十八分又東方より飛来飛行場を中心に旋回する内十二時二十四分八機が入乱れて一斉に堤ヶ岡国民学校の屋根を銃撃した。(中略)小学校前の二軒が焼夷弾により焼失北側志村友次郎氏方天井に中型爆弾一個がプラプラ下り(中略)此六機は東進して理研工場を銃撃工員三人死亡、田植中ノ江田村の娘が銃撃で死に付近で田植え中の住谷弁四郎氏家族と手伝い中の人々も射撃を受けた。此の日前橋の中央駅、前橋渋川間の電車もグラマンの掃射を受け県内の交通機関も大巾に乱れた」²⁷⁾。

『堤ヶ岡村誌』には「午前10時半頃突然空襲警報と同時に敵グラマン戦闘機6機が飛来、この時上空を旋回着陸姿勢に移って居た我方の双発機1機に集中攻撃を加え我機を中川村の田の中に撃墜して去る。あっと思う一瞬であった。12時頃又も8機が姿を現し交互にうなりを立て急降下して来たのが夕立の雨足のように砂ほこりを立てて機銃掃射して上昇しながら爆弾を落と」し、神崎組の給仕をしていた少年1名と、飛行場第三格納庫西側で爆弾の破片を頭部に受けて1名、棟高では爆弾の破片でえい児1名、が死亡した¹⁾。『群馬町誌 通史編下 近代現代』も基本的にその記述を踏襲している。

6機とは、ドッグ掃討隊のグラマンF6F-5ヘルキャット6機である。ただし、その戦闘報告書には双発機の撃墜についての記録はない。次の8機については、目標上空時刻11時50分のイーजी掃討隊のグラマンF6F-5ヘルキャット4機とヴォートF4U-4コルセア4機である。この隊の報告書に、双発機に関する記述がある。双発機を発見して、ヘルキャットが攻撃をこころみたが撃墜することはなかった。

これについては、次の体験記が事実を伝えているようである。引用にあたっては、その臨場感を極力伝えたい

ために、文章の一部省略はあるが、可能な限り紹介することに努めた。

「苗取りをしていた私達の頭上を、日本の輸送機が一機低空で行き過ぎました。「ずいぶん低く飛ぶなあ」。誰かがふとそんなことを言い、そのまま苗取りをつづけていました。が、それも束の間、小型艦載機の編隊が後を追うように現れたのです。それが敵機だとすぐ解ったが、もう逃げる間もありません。(中略)艦載機は私達の頭上に来ると、急降下を始めたのです。そして編隊が大きく傾くと、今度一機ずつ編隊から離れて急降下し、機銃掃射を始めました。(中略)その間、何度か編隊が私達の頭上を行き来しながら、機銃掃射を浴びせたが、そのまま少し遠去かると、今度は近くにある飛行場を銃撃しはじめました。(中略)這這の態で逃げてきた私達が、その川(井野川、飛行場南西約3キロ―筆者註)のところに来たとき、川一面に油が浮いてガソリンの臭いがしておりました。“なんだろう?”おたがいに顔を見合わせている私達のところへ、近くに住む70歳の老母が竹槍を以て走ってきました。「友軍機が向こうに落ちました。早く行ってください」老母は叫ぶと、持っていた竹槍を対岸に向け、何度も何度も手招きをしました。(中略)川に梯子を渡して、這うようにして友軍機の落ちている向こう岸に渡り、そこに駆けつけると、土の中に頭半分突っ込んでいる飛行機を、田圃帰りの男の人が二、三人で掘りはじめており、操縦士一人が外に放り出されたまま、「まだ、土の中に六人居る」指差ししながら新手の私達に助けを求めました。それは、先刻私達の頭上を通過した輸送機で、(中略)中国大陸から軍の任務を持って内地に入ったが、目的の場所が空襲にあっているのも、どこかの山の飛行場に行くように命令され、その途中でこの敵機に出くわして、追われながら畑にでも着陸しようと低空を飛んでいるうちに、電線に触れ、もんどりうって土の中に突っ込んだそうです」²⁸⁾。

この体験記とイーजी掃討隊の戦闘報告書から、この次第が判明した。真相は次のようであろう。日本軍の双発輸送機1機が、着陸予定の飛行場に米軍艦載機が来襲したため、比較的安全と思われた前橋飛行場に向かった。しかし運悪く、飛行場上空でイーजी掃討隊と遭遇、

表4 日米資料の比較

日本側『戦災と復興』				米側				
時間		機数		掃討隊・攻撃隊名	機数	軍目標上空	側 攻撃目標	
第1回空襲警報発令	520	540-619-638-	22機 14機 18機	第2次 ベイカー掃討隊	20機	500-700	小泉飛行場	
同・解除	727			第1次 エイブル掃討隊	11機	530-600	桐生飛行場	
				第2次 ベイカー掃討隊	20機	500-700	前橋・館林飛行場	
第2回空襲警報発令	828			第3次 チャーリー攻撃隊	36機	830-1020	桐生・小泉飛行場	
同・解除	953							
第3回空襲警報発令	1011	1041-1112	13機	中央前橋駅付近投弾	第4次 ドッグ掃討隊	12機(内6機)	1115	前橋飛行場
同・解除	1320	1145-1235	8機		第5次 イーजी掃討隊	8機	1150	前橋→児玉→太田→前橋飛行場
第4回空襲警報発令	1412			第6次 フォックス攻撃隊	34機	1500-1515	前橋→高崎(児玉)飛行場	
同・解除	1712						帰途、前橋の街に爆弾2個捨てる	

ヘルキャットの攻撃から逃れるために低空飛行した結果、電線に触れて墜落してしまった。これを遠望していた住谷修氏をはじめ地元の人々は、敵機によって撃墜されてしまった、と判断した。このまぼろしの「撃墜」は平成14(2002)年に刊行された『群馬町誌 通史編下 近代現代』の記述まで、踏襲されていくことになった。

また、当時国民学校2年生であった、元当事業団事務局長の原田恒弘さんは、体験記『ひまわり』に次のように書かれている。

「忘れもしない昭和20年7月10日、午前10時ごろだろうか、いつものように警報が発令された。この日は朝からしきりに警報が発令されていた。母と私は、余裕をもって身支度をして玄関を一步でた。ちょうどその時、南東の方角から超低空で、一機の小型機が私たちに向かって飛来した。ほんの一瞬の間、私は直感的にその小型機がグラマンであることを察知した。(中略)敵兵の姿が見えた。敵兵は、航空用のメガネを額に当て、首にはピンクがかったマフラーをしていた。(中略)グラマンは、私の頭上機首を左に傾け、円を描くように反転した。翼に描かれた星のマークがひと際鮮やかであった。母と私はぼう然と、ただ立ちすくんだままこの光景を見ていた。

(中略)間もなく、再び敵機の爆音が聞こえてきた。今度こそやられるに違いないと思った。ギューンという低空を飛行する気味の悪い爆音、敵機は急降下、急上昇、反転を繰り返し、(中略)遠くのほうから、ダダダ、という鈍い機銃音が聞こえて来た。機銃掃射だ、やはり、そう思った瞬間「ズシーン」という鈍い音ともに、地面がびりびりと震え、ガラス戸がガタガタと震動した。爆弾だ」「思いもかけず、目の前で敵兵と遭遇しようとは、数秒間の、この信じがたい出来事は、映画のコマ送りのように、今でも鮮明に記憶」²⁹⁾されている、という。

原田さんが目撃したグラマンは、時間的に見て前橋飛行場を攻撃したドッグ掃討隊6機の中の1機である。

ドッグ掃討隊に限らず、その他の掃討隊・攻撃隊の戦闘報告書には、民間人に対する非人道的な行為は列車の襲撃以外に、一切の記述はない。前橋飛行場の攻撃前に、田植え中の民間人を機銃掃射するなどの行為である。

この時、藤岡では八高線の列車が機銃掃射を受け、小野信号所の藤岡よりのところで機関車のタンクの部分が損傷し2名の負傷者がでている³⁰⁾。八高線の列車を銃撃したのは、児玉飛行場を攻撃したドッグ掃討隊の第6戦闘爆撃飛行隊のコルセアであった。その報告書には「陸橋上の汽車に対して機銃掃射を行い、その結果、その汽車は蒸気に包まれて立ち往生した」²¹⁾とある。

一方、高崎での空襲被害はどのようなものであったのか。フォックス攻撃隊が高崎飛行場に対して投下したのは、260ポンド破碎爆弾80発、500ポンド通常爆弾21発、ロケット弾37発に及び、この日の空襲では、最大規模で

あった。また、ドッグ掃討隊の1機が発射したロケット弾4発の行方はどうなったのだろうか。

高崎市の空襲被害としては、北通町の本元寺や田町、羅漢町などが機銃掃射やロケット弾の攻撃を受け、少年を含む男性2名、女性5名の計7名が亡くなり、多くの人が負傷した³¹⁾以外は記録されていない。このことから、米軍が前橋飛行場を見失って攻撃したという高崎飛行場とは、隣接する埼玉県児玉飛行場であった可能性が高い。

そして、この空襲被害こそ、前橋飛行場を攻撃したドッグ掃討隊の1機が、降下中にロケット弾を発射できなかったのも、そのまま飛行場の南5マイル(約8キロ)にある建物に向けて発射した、結果によるものであった。

「北通町の東本願寺近くの民家が被弾した。翌日動員工場からの帰途、古中山道にある古刹・東本願寺(現・寺名は本元寺)に立ち寄ったのだが警防団の人が居て素通りを指示されたので被害状況は不明であった。次の日工場内で、東本願寺近くに住む同級生から死者と怪我が出たと聞かされた。寺に近接していた民家が直撃(ロケット弾)され、この家の方を含めて六名が亡くなられ、寺に寄宿していた東京通信講習所高崎支所の寮生三名が爆裂した破片で負傷した」³²⁾。また、「午前11時30分艦載機1機襲来、市の北から侵入して南へ、引き返して来て田町、東本願寺辺を機銃掃射、渋谷下駄店、渡辺提灯店、羅漢町阿久沢助産婦、若林製材老夫婦などが死亡している。負傷者は数人、地域は田町、羅漢町、北通町第一辺りである」³³⁾。

前者では、時間を午前8時過ぎ、飛来した敵機をP51とするなど、誤りがあり、また後者ではロケット弾について触れてはいないが、これらの記述が、ドッグ掃討隊1機による攻撃の結末であろう。

『戦災と復興』は、7月10日の地域別投弾数を次のように記録した。

前橋市は投弾数一爆弾1、不発弾0、死者2、半壊建物1、群馬郡東村は投弾数一爆弾1、不発弾0、重傷2、群馬郡堤ヶ岡村は投弾数一爆弾19、不発弾0、重傷3、軽傷5、半壊建物1、全焼建物4、堤ヶ岡飛行場は投弾数一爆弾8、不発弾0、死者1となっている。その備考欄には「前橋市に対しては爆弾1ヶ投下せる外1ヶ所に機銃掃射を行うのみにして来襲度数に比し被害軽微」と記した。『群馬県戦災誌』では、「前橋市にも70機が前後4回にわたり攻撃、爆弾および機銃掃射を行い、市内で2人の死者を出した。また同時に高崎市にも攻撃を加えるなど、この日の空襲で前橋・高崎はもとより、群馬郡下の堤ヶ岡・東村、藤岡、新田郡下の尾島・生品、山田郡の矢場川村、邑楽郡下の高島村・小泉・館林など県下11市町村に被害を与えた。特に堤ヶ岡飛行場に対しては銃爆撃も激しく、国民学校2棟が大破し、飛行場にあつ

表5 県下の空襲被害（『戦災と復興』による。『群馬県戦災誌』では数字が若干異なる。）

7月10日	市町村別	死者	重傷	軽傷	計	全焼	半焼	全壊	半壊	計	罹災者数
	前橋市	2			2				1	1	2
	高崎市	3	8	2	13				3	3	6
	群馬郡堤ヶ岡村	1	3	5	9	4			1	5	10
	群馬郡東村	1			1						
	多野郡藤岡町			2	2						
	新田郡尾島町					1				1	
	新田郡生品村	1		1	2				4	4	
	山田郡矢場川村		4		4			5	10	15	
	邑楽郡高島村			1	1						
	小泉町	2		2	4			4	6	10	
	総計	10	総計 15	総計 13	総計 38	総計 5		総計 9	総計 25	総計 39	総計 18

た軍用機も爆破された。この日群馬県下の被害は、死者13人、負傷者29人、家屋の全壊10戸、半壊25戸、全焼4戸³⁴⁾であった（表5）。

投弾数、死傷者の数ともに、上記の数値は正確ではない。

米軍側の資料によれば、前橋飛行場に対しては、260ポンド破碎爆弾11発を投下しロケット弾97発を発射している。高崎飛行場（児玉）には、260ポンド破碎爆弾80発、500ポンド通常爆弾21発を投下しロケット弾37発を発射、桐生（新田）飛行場には、260ポンド破碎爆弾70発、500ポンド通常爆弾16発を投下しロケット弾32発を発射、小泉飛行場には、260ポンド破碎爆弾14発、500ポンド通常爆弾20発を投下しロケット弾14発を発射、太田飛行場には、ロケット弾10発を発射、そして各飛行場や館林飛行場にも機銃掃射の雨を浴びせた。

死傷者の数にしても、群馬郡堤ヶ岡村や前橋飛行場での死傷者、高崎における死傷者数など、実際の数よりも少ない。さらに言えば、前橋飛行場上空で墜落した双発機の搭乗員の死傷者は、その中に含まれていない。

おわりに

昭和20（1945）年8月5日夜から6日未明にかけて、前橋市街地はB29の夜間焼夷弾攻撃を受けた。テニアン島北飛行場を離陸したB29は102機、このうち前橋上空に到達したのは92機であった。前橋市に投下されたのは、焼夷弾691トン、破碎爆弾18トン、一般爆弾15トンの計724トンである。市街地の80％が焦土と化し、死者は535名であった。8月14日には伊勢崎・玉村が空襲され、高崎市も被害を受けた。

B29の日本本土空襲についての研究は、大都市を中心に行われており、比較的空襲の実態が判明している。しかし、前橋を含めた地方都市についての研究はこれからの課題である。ましてや今回紹介した米軍艦載機の空襲については、ほとんど研究されていない。そもそもその報告書の存在が確認されたのは、ごく最近のことであったからである。

発掘調査の過程で、地元作業員さんから飛行場につい

ての思い出や空襲体験などをたびたび聞かされた。また、現地説明会では、飛行場についての資料も紹介したところ、一番の関心がもたれたのは、それについての展示コーナーであった。

今回『陸軍前橋飛行場物語』として、飛行場設定前後の状況、昭和20年7月10日の米軍艦載機の空襲に焦点をあてて紹介したのも、わずか2年ほどの歴史である前橋飛行場ではあっても、そこには日本の昭和前半の歴史が凝縮されていたからである。

60年の歳月は、戦争体験を風化させていく。しかし忘れてはならない歴史、そしてまた明らかにしていかなければならない歴史がいかに多いかを、今回の調査で実感した。忘れ去られた事実を掘り起こしていく作業は、原始・古代の歴史を解明する作業と同等に、根気のいる作業であった。果たして理解してくれた研究者がどれほどいたのだろうかと、暗澹たる思いもする。そうした中で、調査の必要性をご理解していただいた、関係者の皆様には厚く御礼申し上げる。末尾にご芳名を記した。

近現代の遺跡といえども、原始・古代の遺跡と同様に発掘調査は可能である。しかし発掘だけでは明らかにすることのできない歴史があることも事実である。史料調査や関係者・体験者の記録の掘り起こしは、調査には欠かせない方法であった。

前橋飛行場を巡る一つ一つの歴史的事実を確定していくことは、遺跡調査に携わってきた担当者の一人としての責務の一端と考えている。今回、このような文章をまとめた由縁である。

なお、深井正昭氏から提供を受けた陸軍特別攻撃隊「誠第36・37・38飛行隊」についての資料は、後日あらためて紹介したい。

謝辞 本稿執筆には次の方々のご理解・ご協力、資料提供をいただいた。厚く御礼申し上げます。

西毛幹線関連遺跡の調査担当者及び参加者の皆様、石塚久則氏、石守 晃氏、石原良人氏、金井安子氏、清水吉二氏、内藤真治氏、檜崎修一郎氏、深井正昭氏、株式会社文林堂、空襲資料研究会の皆様、高崎市史編纂室の

皆様

註・参考文献

- 1) 近藤義雄 「群馬の近代化概観」『群馬県近代化遺産総合調査報告書』平成4(1992)年 群馬県教育委員会
- 2) 「本土航空作戦記録 附録第三 本土航空施設の梗概」防衛研究所図書館所蔵
- 3) 「飛行場記録昭和19年4月20日調製第一航空軍司令部」防衛研究所図書館所蔵
- 4) 「本土における陸軍飛行場要覧第一復員局作製」防衛研究所図書館所蔵
- 5) 釜井耕輝 「昭和17年～18年頃内地における飛行場設定の状況について」防衛研究所図書館所蔵
釜井の略歴は次のとおりである。昭和15年8月熊谷飛行学校下館分教所の飛行場長、昭和16年8月陸軍航空本部総務部部員、昭和17年12月～18年7月陸軍大学校航空専科学士、昭和18年8月陸軍飛行場設定練習部研究部部員兼陸軍航空通信保安長官部部員兼陸軍航空審査部部員、昭和19年9月第32軍参謀として南西諸島の航空基地の強化に努む、昭和20年2月第5航空軍参謀、5月朝鮮移駐、敗戦を向かえた。
- 6) 国立国会図書館憲政資料室所蔵
- 7) 狭山市立博物館所蔵
- 8) 防衛庁防衛研修所戦史室 「本土防空作戦」昭和43(1968)年
- 9) 藤原 彰 「中国戦線従軍記」平成14(2002)年 大月書店
- 10) 2)に同じ。昭和18年以降整備した飛行場(除秘匿飛行場)は次のとおりである。新設飛行場一壬生、水戸北、成増、松山、児玉、前橋、松本、伊那、大島、新島、富士、小牧、清州、佐野、由良、廣島、防府、高松、蘆屋、福岡、曾根、萬世、上別府、唐瀬原。拡張飛行場一油川、印旛、松戸、老津、富山、三国、都城東。
- 11) 堤ヶ岡村誌編集委員会 「堤ヶ岡村誌」昭和30(1955)年
- 12) 群馬町誌編集委員会 「群馬町誌」平成14(2002)年
- 13) 森 茂・長澤 誠 「飛行場」『土木工学の概観』昭和25(1950)年 日本学術振興会
- 14) 「航空部隊一覧表(占領軍に対する説明資料)」防衛研究所図書館所蔵
- 15) 群馬県 「群馬県復員援護史」昭和49(1974)年
- 16) 米山和也 「艦載機空襲の米軍資料」『空襲通信』第5号 平成15(2003)年
- 17) 石井 勉 「アメリカ海軍機動部隊」平成元(1988)年 成山堂
- 18) 報告書番号 VBF-6 #51 VF-6 #40
- 19) 報告書番号 VBF-6 #52 VF-6 #41
- 20) 報告書番号 CVG-6 #31 VT-6 #32 VB-6 #27 VBF-6 #53 VF-6 #42
- 21) 報告書番号 VBF-6 #54 VF-6 #43
- 22) 報告書番号 VBF-6 #55 VF-6 #44
- 23) 報告書番号 CVG-6 #32 VT-6 #33 VB-6 #28 VBF-6 #57 VF-6 #45
- 24) バレット・ティルマン、苅田重賀訳 「第二次大戦のTBF/TBMアヴェンジャー部隊と戦歴」平成15(2003)年
- 25) 前橋市戦災復興誌編集委員会 「戦災と復興」前橋市役所 昭和39(1964)年
- 26) 阿久津宗二氏が「空襲のありさま(決戦下の小学生として)」の一文を書かれている。(['総社町誌』昭和31年)。「六月十四日、私達は堤ヶ岡飛行場誘導路の芝植えの勤労奉仕に行った。すばらしい飛行機(ドンリュウ、ショウキ、ハヤブサ)をみた」。阿久津少年が見たのは空襲の26日前である。「隼」は確かに駐機していたのである。なお、阿久津宗二氏は当事業団発足時の初代調査研究第一課長として、昭和55年3月31日まで在職された。
- 27) 国府村誌編集委員会 「国府村誌」昭和43(1968)年
- 28) 鳥羽芳枝 「機銃掃射の下で」『敗戦の傾斜』昭和54(1979)年 あさを社
- 29) 原田恒弘 「ひまわり」平成7(1995)年
- 30) 「藤岡市史 通史編 近世 近代・現代」平成9(1997)年
- 31) 清水吉二 「戦争と空襲」『街道の日本史17中山道』平成13(2001)年 吉川弘文館

- 32) 一場要二郎 「ああ紅の血は燃ゆる」
- 33) 清水吉二氏提供資料
- 34) 佐藤寅雄編 「群馬県戦災誌」平成元(1988)年 みやま文庫